

# 深夜廻 もう一つの物語

はるばーど

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、あの子がいなくなった

そうだ。探しに行こう。

これは一人の女性と少女が深い深い夜の町を徘徊するもうひとつの「深夜廻」です。

時系列的には本編「深夜廻」の後の時間軸に当たるものです。なお、前作『振り返ってはならない 夜の道』の続編にあたります。

感想等も気軽に書いてくださって構いませんので、よろしくお願いいたします。  
※アンチ・ヘイトは念のためです。

【@piyoberd5642】↑小説お知らせ件、私の生態報告用のT w i t t e r  
【追記】タイトル名を変更いたしました

# 目次

オリジナル要素の解説	1
黄昏	
第一章 黄昏	6
21	
第一章 黄昏 もう一人の友達編	
第二章 疑惑	41
第三章 四つの灯籠と鈴の音	55
夜更け	
第四章 コトワリ神社	69
第五章 コトワリさま	83
第六章 図書館にて	101
第七章 黄金の影	116
第八章 赤と青の狛犬と妖怪	130
第九章 虚ろ	150
第十章 縁の神様と怒りの化身	167
第十一章 廃屋	189
第十二章 山奥へ	200
第十三章 虚空	217
第十四章 断ち切り	230

## オリジナル要素の解説

〔神谷 クレイ〕

性別 女 年齢 18歳 身長179cm

金色の髪を持つ女子高校生。今作品の主人公。男勝りな性格で非常に力持ち。なお、家族想いでもある。

趣味は料理と中世の歴史勉強。好きなものはクレイモア〔大剣〕の模型。

苦手なものは己が知らない物体である。例えば、未確認飛行物体や未知の現象などの説明がつかないもの。幽霊などは平気。

汚い場所や狭い所が若干苦手であったりもする。

一応日本人であるが、名前が英語圏であるのが特徴。

理由としては父親がイギリス出身の白人のため、金髪を持ち高身長に育った。因みに髪はストレートだが、先が丸まっており貴族風にも見える。頭にヘアバンドをしている。

弟がおり、名前は〔アレクサンドラ〕。長いので〔アレックス〕や〔サーシャ〕と呼ば

れている。

前作『夜廻 振り返ってはならない夜の道』の時系列においては、まだ都会から『深夜廻』の町まで引越してきておらず、登場はしなかった。

今回において、彼女の従妹の関係にある「神谷 ルキア」の身を案じ、彼女が住んでいる場所の隣町へと引越してきた。

深夜廻ではルキアが殺人を犯したと聞きつけ、偶然出会った『ハル』と独自で捜索を図ることとなる。

作中においては強気な性格で徘徊者を蹴散らすが如くに探索をしていく。しかしその強気な性格からか周りが見えなくなりがちで『ハル』を置いていってしまうこともしばしば。

ルキアとはかつて喧嘩別れをしたままになっていて、その事を非常に悔やんでいる。異常なまでに彼女に固執するのはこれが理由。

彼女には是非とも、従妹を無事に救ってもらいたいものだ。

【神谷 ルキア】

性別 女 年齢 18歳 身長 183cm

【クレイ】とは逆に灰色の髪と美しいほどの白い肌を持つ女高校生。鼻の近くにそばかすがある。性格は暗めで、自己肯定感が非常に低い。

虚ろの瞳に限により、雰囲気は劣悪だがそれ以外を覗けば絶世と言っても過言ではないほどの美女。

前作『夜廻 振り返ってはならない夜の道』の主人公。

父親は死別、母親は事故により植物状態とかしている。

叔父から虐待を受けていて、酷く心を病んでいた。異質な見た目と妙な美しさにより非道な虐めにもあつていった。自身で灰色の髪を引きちぎろうと考えたこともある。

前作においては、少女との探索で一旦は自信を取り戻すも、謎の怪物【ルーシー】において友達である少女の片目を潰されてしまい、落胆。化け物に自我を乗っ取られてしまう。

乗っ取られるはしたものの、解き放たれると共に記憶を失い徘徊を続ける。酷く不安定で、自分がどういう状態なのかをも把握できていない。

ここからは余談で前作に引き続き登場している母親の正体だが、実は謎の怪物【ルーシー】に魂を捧げた狂信者である。

植物状態になっているのもそれが理由で、実際は事故に遭ったというより自ら魂を捧げて廃人と化していただけである。

物語内では娘であるルキアを生け贄に捧げるために様々な策を放ってくる。

なお、過去に何があつたのかは物語内にて明かされる予定です。

### 怪物【ルーシー】

コイツも前作に引き続き登場。見た目の詳細は前作の『漆章 丑三つ時』を参照。

狡猾で残酷な性格と趣味の悪さを持ち合わせていて、人をいたぶるのを好む。科学ガスによる幻覚や紅蓮の炎で体内から焼き尽くすなどの行為を長い間繰り返し返している。

少女の目を潰し【ルキア】に絶望するような恐怖を植え付けた。

また他の徘徊者とはかなり異なり、人に自らの正体を明かしていくという異質な点が挙げられる。

コイツが出現した周りには徘徊者が行方を眩ます。死者にも好かれずとは流石である。

因みに『よまわりさん』や『双子の蛇』、『コトワリさま』などに因縁があるらしい。神々からも異形からも好かれず、それは奴が最も生命に近い存在であるからかもしれない。神様よりも純粋な考えで、底知れぬ憎悪を正直にぶつけるからである。

### 【双子の蛇】

冒頭の物語に登場する二匹の蛇。【ルキア】と【クレイ】の血縁に強く関わる。

隣町に廃神社が存在し、そこに彼らの名残が残っている。そして廃れた神社が聖なる力を発揮することはない。

# 黄昏

## 第一章 黄昏

とある夏の日のこと。

私の大切な友達とさようならしました。

赤いリボンを付けた女の子。

名前は「ユイ」といいます。

でも、新しい友達も出来ませんでした。

名前は「チャコ」。

小さいけど勇敢で私を守ってくれた頼もしいワンちゃん。

もうすぐ私は引越しちゃうけど、この子が居れば大丈夫。

そう思っただけでも、やっぱり馴染みがあるこの街から離れるのはちよつぱり寂しい。

学校や遊び慣れた場所もあるし、何よりユイと離ればなれになるのが、割りきつたとはいえ、どうしても寂しかった。

だから、お散歩に出掛けることにした。それも暗い暗い夜道のお散歩。

あの神様に貸してもらった鉢も返さなければいけないし。

そして最後に一目、この町を見据えておきたいという私の単なるワガママなのだけけれども。

その二度目の夜。私は、とある不思議な女性に出会いました。

彼女は家族を探している、と言っていました。元気な性格で何処までも頼もしい姿をした人。しかし、何処か悲しげにも見え、誰かに固執しているようにも見えるその性格。

その目的と本人の性格がなんとなく、ユイに似ていてどうにも他人事に思えなかった。

だから、助けてあげよう。このお姉さんを。悔いが残らないように精一杯。

そうあの時は思っていた。

あの人との出会いはユイとの別れを告げた、2日程後の夜だった。

---

私は何時通り、自宅の自室にて今まで集めたものを整理していた。今まで、大切に扱っていた物まで殆ど置いていかなければならないのは、心に相当な負担をかける。

しかしもうすぐ、このお家から引越しをしなければいけない、その事実が変わらない。

今日はお父さんもお母さんも家において、何やら引越しについての話題が上がっている。しかし、穏やかに話している雰囲気という訳ではなく何やら、もめているように時々、お母さんのつんざくような奇声が聞こえてくる。

内容は私の腕について話していて、お母さんはそれを心配してお父さんともめている

みたい。

私はユイとお別れするために、ある神様に腕を捧げた。この小さかった左腕。後悔はしていない。しかし、親からしたら大問題もいいでここで物凄く心配している様子だった。

二人には、この件はまだ言っていない。というか、言っではいけない。そんな気がする。

両親には悪いと思いつつも私は二人の目を盗み、ポシエツトを持って、静かに玄関の戸を開けて、黄昏の町へと再び踏み込んだ。

再び踏み込んだ夜の景色はより鬱蒼としていた。空は若干、朱色に染まっていたものの、もう殆ど見えないほど。

これから完全な闇夜がやってくる。

そして、今回の夜廻にはチャコを連れてきた。理由は私一人ではまた拐われてもおか

しくないから。

後、単純に怖かった。幾ら見慣れた町並みとはいえ、夜になるとその状況は一変する。敷地から出て、すぐに右を向くと顔だけの大きな鯨が道を塞いでいる。まるで私に目的の方角へと行かせないと言わんばかりに道を阻んでいる。

(うーん、困ったな……。神社へはこっちの道からしか行けないのに……。)

仕方ないので、回れ右をして反対方向へと向き直り、迂回することにした。

相変わらず、チャコが私の前を先導して歩いてくれて心強い。お化けがいても、ワンとかわいらしい鳴き声で居場所を知らせてくれて、すぐにその存在に気がつくことができさる。

この町は永遠にお化けが徘徊したままなのだろうか、時々疑問に思ってしまうことがある。たくさんお化けがいるけど、時々見ているのも辛くなるくらいかわいそうな見た目をした人もいる。

死んだままの状況が把握出来てしまうほど、リアルに形が残ってしまっているお化けも少なくない。

幾度も想像してしまう。彼らはどんな目に会ったのだろう。自分もいつかこんな体験をするのかな。などと余計なことを考えてしまう。

だつてそうでしょ。死んでしまつて、見も心も変わつてしまつた彼らの気持ちなんて分かるはずなのに。

そんな彼らのことを考えながら、徒歩を進めていたが、とあることに気が付いた。

目的の方向とは全然違うほうへと導かれていることだ。さつきから迂回路を進もうとしても鯨に阻まれて、目的地の北の山から反対方向へと遠ざかつている。

何かがおかしい。こんなことはあの時以来なかつた。お化けはただ、自らの憎しみに身を任せて行動しているはずなのに、知性がある行動が分かる。

「キャン！、キャン！」

「チャコ!? どうしたの!？」

チャコが突然、前方に向かって吠え始めた。チャコはだいたいのことでは、滅多に鳴いたりしない利口な子だ。

何かとてつもなく恐ろしい気配が近付いている証拠であることは間違いない。

「に、逃げなきゃ……………」

私は途端に嫌な予感がし、進行方向とは反対に足を向け、一気に走り出した。

チャコも続いて、走り出し私の後をついてくる。心臓の鼓動が速くなる。息が苦しい。後ろを振り返ると白いモヤモヤが追いかけてきていた。

前に何度もみた、白いお化け。目が肥大化し、不気味なうめき声を上げて、何処までも追いかけてくるお化け。人のような形は残していても、もはや人とは違った存在になつてしまっている。

だけど、何故なのか。何処か安心感に似た気持ちを抱いた。

正体を知ったからなのだろうけど、それにしてもお化けを見て安心感を抱くなど、前の自分にはあり得なかった話だ。

お化けを見ると、何も考えずに怯えて逃げ出していたものなのに。

私はそつと胸を撫で下ろした。少し冷静さを取り戻し、私は背負ったポシエットから白紙で作られた紙飛行機を取り出す。そして、ひゅつとお化けの方へ投げつけた。

すると、お化けが紙飛行機の飛んでいった向きに身体を向け、ゆつくりとそれを追いかけていった。

「今のうちに……………」

お化けから遠ざかり、なんとか十字路を曲がってやり過ごすことができた。ただ、ほっとしたのも束の間。

シユララララララ………

と蛇のような鳴き声が聞こえてきた。チャコが再び警戒して、うなり出す。

辺りを警戒して見渡すと小さな手の平くらいの大きさをした蛇が一匹、こちらの様子を伺っていた。

普通の蛇かと思っただけけれど、この辺りで見掛ける蛇とはちよつと違う。

まず、角が生えていた。頭の後ろに左右2本ずつ生えていて、計4本生えている。それに禍々しい黒の模様。三本に別れた尾。首は1つしかないからテレビとかで見る怪物によく似ている。

それに鋭い眼光。今にも睨み殺されてしまうんじゃないかと思うほど荒々しい眼差しを此方に向けている。

襲ってくるような様子は見られないが、チャコが鳴きやもうとせず、ずっとその蛇に對して警戒心を抱いていた。そして、

「あつ！チャコ！」

掴んでいたリードごと引つ張っていつてしまい、その蛇に襲い掛かろうとした。

しかし、蛇は一目散に十字路の奥へと逃げ出した。それを追いかけて、チャコも続いて行ってしまった。

二匹の足はとても速くて、もう目視で確認できないほど離されてしまった。私はポツンと十字路に取り残された。

「ど、どうしよう……。見失っちゃった……。でも追い掛けないと！また一人で取り残されたらあの子も悲しいからね！」

柄にもなく私は無理矢理、自分を正当化し、フォローをしながら、二匹の向かった先へと足を進めようとしたその時——

ガンツ!!

「うわっ?!?」

「キャツ?!?」

曲がり角で誰かにぶつかり、私は尻餅を着いた。勢い良く、ぶつかってしまったためにおでこが少々痛む。一方で盛大に転んでしまった制服をきた大きな人は座り込んだまま此方を振り向いた。

「ご、ごめんなさい!まさかこんな時間に人がまだいるとは思っていなかったの!」  
「痛てて……すまないこちらこそ、前を視野出来ていなかった……ツ!」

男口調で背も高かったので、男の人かと思ったけれど、確認するとそれは女の人だった。年は18歳くらいでおしゃれなブラウンの制服を着ている。紫色の瞳でクールな表情。髪の毛は意外にも金髪で綺麗な髪質をしていた。

しかし、彼女は驚いた表情で私のことをまじまじと見詰めている。私はドキツとして思わず、目線を反らしてしまう。

(ど、どうしよう……。こんな大きな女の人なんてお母さんくらいしか会ったことないから、どう話していいか分かんないよ……………)

どうにか話を反らして、早くチャコを追いかけたいのだが、なんて声を掛けられいいのか分からず、ゴニョゴニョと小声でしか喋ることができない。

どうすればと混乱していると口を開いたのは彼女のほうからだった。

「君は……………」

そうポツリと呟いた。やっと頭がハッキリとしてきた。ようやく言葉が浮かび上がってきそう。しかし、目の前のお姉さんは呆然と私を眺めているので、今度はこつちから声を掛けてみた。

「あの、大丈夫ですか。お姉さん……………」

すると、お姉さんは我に還ったかのように目をぱちくりさせ、首を振ってから私に対して、ようやく話し掛けてくれた。

「……………ん？あ、ああ、重ね重ねすまないことをしてしまったな。」

私は彼女に手をさしのべ、お姉さんの手をとる。立ち上がった彼女はますます大きく感じた。下手したら、普通の大人の女性よりも大きいかもしれない。それにさつきは気付かなかったけれど、髪にかけてあるヘアバンドがとても綺麗な色をしていた。

彼女は少し乱れた髪をかきあげて、整えると唐突に額を押さえ出して、小さく笑いだした。

「フハハ、情けないものだな。貴女のような女性に手を煩わせてしまうとは。君、名前は？」

(えっ!?)

この流れで突然名前を尋ねられるとは思って見なかったので、少しドキツとした。

しかし、改めて見るととても日本人とは思えないほど綺麗な人だ。金髪だし、それに背が予想以上に高くして私がまるでこどもにもなったかのように(実際子供だけど)。

今度はこつちが見とれている形になってしまい、金髪のお姉さんは、よくわからなそうに首を傾げた。私は慌てて我に返り、何とか誤魔化そうと自己紹介をすることでお茶を濁す。

「あ、はい!私、ハルです!よ、よろしくお願ひします!それでお姉さんの名前は……?」

「よろしく頼むぞ、ハル。おっと、私の名前だったか?すまない、名乗るのをすっかり忘れてしまっていたな。

私の名は……………

# 第一章 黄昏 もう一人の友達編

ある夏の日のことだ。

ある殺人事件が発生した。

それも単なる無関係の他人の家で起きた出来事ではなかった。

私の親戚に当たる人物が殺害されたと言うのだ。

かなり酷い現場だったようで、辺りは血の海だったらしい。

しかも、殺害を企てた犯人はこれまた他人ではない人物だという。

何の因果か、その犯人というのが私の従妹だというのだ。

あの可憐な灰色の髪を持ち、キラキラと透き通っている黒目の瞳。美しい白い身体に、きらびやかな顔立ち。

私の自慢の従妹。いや、ここまでいくともう一人の姉妹にさえ思えてくる。

そんな従妹が、叔父に当たる人物を殺害して行方不明となった。

あの大人しくて、虫も殺せないほど優しい性格をした彼女が殺人など犯して、逃げ出したなど納得できない。

確かに一度、風の頼りで彼女が虐待されていると聞いたことがある。その時はまだ、私も幼くて親に訴えるなどとはとてもじゃないが出来なかった。

助けられなかった。自分にとってとても大事な存在であるはずなのに。

しかし、今回ばかりは違う。

友人に聞いた。「彼女はまだ、夜の道を彷徨っている」と。

ならあの時、何も出来なかつた無念をここで晴らすべきではないかと。

まだ助けられる。

そんな「深夜廻」の始まりはあの少女との出会いからだつた。

私は高校のクラスルームにいた。現在、高校の3年生で進路に悩まされる日々を送っている。至って、普通の学生生活。

思えば、この時はまだ幸せだったのかもしれない。この時、私は従妹に会えなくなつて、かなりふてくされていた。

何故なら、毎日が退屈だったからだ。

確かに私は、友達はそこそこいるし、悩み事があつたとき、相談に乗ってくれる先生や両親だっている。端から見れば充分、贅沢な環境といえるだろうが、私は満足できていなかった。

従妹と連絡が途絶えたのが、彼女の父が亡くなってしまった以来だったものだから、仕方ないといえば仕方ないと思うが、あまりにもその期間は長く、まだかまだかと首を長くして待っているというのに、一向に連絡をくれる気配はなかった。

そのため、普段は積極的な性格をしている私でもかなり長期間、機嫌が悪い状態が続

いている。

この時は、彼女に身に何が起きているのかも知らずにただ、ひたすら普通の学校生活を送っていた。

「おーい！委員長！ちょっと、手伝ってくれえ！」

廊下のほうから自分の名前を呼ぶ男の声が聞こえた。私はもたれ掛かっていた教室の壁から背を離し、声のする廊下へと足を運ぶ。

すると、私のクラスメートの男子が重そうに段ボール箱を二つ抱えながら、教室の目の前に立ち止まっていた。顔は汗だけで今にも、倒れそうなくらい真つ赤だ。凄まじく暑そうである。

現在は昼休み。本来は皆、昼御飯を食べている時間帯のはずなのだが、何の用だろうか。

「私に何か用か？ 隆。随分と重そうなものを抱えているが……。どうしたのだ？」

すると、男は私が出たことに気付き、喜びの表情を浮かべた。

「ああ、委員長！ 助かった！ 悪い、暇ならこの荷物体育館に運ぶの手伝ってくれないか？ バスケツトボールやった後だからクタクタなのに、先生に押し付けられちゃってさ。」

昼休みは4時限目の後にあるのだが、その時間は私のクラスでは体育など行っていないし、仮に行っていたとしてもバスケツトボールなんてこの季節にやるスポーツではない。

サボったことを堂々と私の目の前で発言するのもどうかと思う。

が、気にしていても仕方がない。どうにもならない連中もいると割りきるしかあるまい。

しかし、この程度の力仕事ならば、私にとっては容易いものだ。依頼を受けても問題なさそうである。見返りもきつと貰えるだろう。

「よし！承ったぞ。ただ、これは私が今、機嫌が良かったから引き受けただけの話だから。勘違いはするなよ、隆。」

「ありがてえ！じゃあ、これ一個体育館に持って行ってくれよ！流石、校風委員長！頼りなるうー！」

「……………フン、こういう時にだけすぐにごまをする癖辞めた方がいいぞ。」

「えへへ……………すみません。」

そう言つて私は、ひよいと3kgほどありそうな段ボール箱を持ち上げた。

「やっぱり、お前力凄いなー。それけっこう重いはずなんだけどな。」

確かに重い荷物だが、そこまで苦に感じるほどでもない。

私も女の中ではそこそこ、力があるほうだと思っているが、たかが毎日100回スクワットしているのと、水泳教室で十年ほどとバスケットボール大会で3回優勝した程度だ。

これくらいでは、力が強いとは言えないだろう。

「そうか？こんなもので弱音を吐いていたら、男としてどうかと思うぞ。」

「へいへい、相変わらず手厳しいこつて。じゃ、頼むぞー！」

彼は結局荷物を私に全て押し付けて、元来た昇降口方面へと逆走していった。

「お、おい！待て、隆!!……………全く、相変わらず人の話を聞かないヤツだ……………」

ため口を利いても仕方ないと判断した私は、大人しく段ボール箱を運送することにした。

## 数時間後

あれから、私は何事もなく段ボール箱を運搬し終えた。そして、何時間かたった後に部室によつたら隆が体育の教師に叱られているのを目撃した。顧問の先生に伺ったところ、どうやらあの荷物は授業をサボっていた隆に対しての罰だったようなのだ。

それを私に預けて、逃げ出したことは結局、バレてしまったらしい。その件で叱られているのだろう。

何しろ6 kgの段ボールを女に押し付けて逃げたのだ。当然の報いだな、と私は奴に同情はしてやらなかった。

そんな形で部活も終わり、今は帰路にて、友達と話をしながら下校しているところだ。友達といつても自分が通っている陸上部の生徒でもなく、文化部で活動している後輩なのだ。

いつも通り、そいつと会話をしているとこんな話題が出てきた。

「なあ、知ってる？あの殺人事件。」

といきなり、後輩が殺人事件などと物騒な話題を持ち掛けてきたのだ。普段は、のんびりしていて穏やかな話しかしないのに、今回ばかりは少し真剣な表情をして話していた。私は首を傾げて返事を返した。

「ん？殺人事件？いきなりなんだ？それがどうかしたのか？」

「そうそう、なんでも2日ほど前に隣街の住宅で40代くらいの男性が殺害されたって事件なんだけどさ。」

「ほう、それで？」

「どうやらその犯人が灰色の髪をした若い女性だって言うんだよ。隣街って割と近しい、年が近いってのもあってちよつと怖くてさあ。」

(灰色の髪……………?)

犯人の特徴である灰色の髪という言葉が引つ掛かった。

世界で探しても中々、珍しい部類の人間なのに、この辺りの町で灰色の髪をした女はあの子以外に考えられない。

だけど、私はまだ確証が得られないのだ。もしかしたら、偶然にも同じ灰色の髪をした人がいて、その人が事件を起こしただけと信じたかったから。

気になった私は、彼が犯人の名を存じているのか尋ねてみることにした。

それは私が安心感を得るためのただの自己満足でしかなかったのだが、この時はそんな気持ちは眼中になく、考えている余裕もなかった。

「お、おい、その犯人の名前は分かるか……………」

心臓の鼓動が高鳴る。この一言で決まるのだ。なるべくならば早く述べてほしい。

「え？犯人の名前？え、えーっと、確か…なんて言っただけかなあ……………ルキ……………ルキ  
なんとかだったような……………」

(……………ッ！)

間違いない。あの子だ。

彼女の名前は私と同様に漢字では書くことが出来ないし、他にそんな名前が付けられた人物は見たことがない。十中八九、彼女で間違いないだろう。

しかしまたどうして殺人なんて行ってしまったのだろうか。

あんなに優しい子がどうして……………。行動の理由に辻褄が合わない。

だが、理由と彼女の安否が知りたい以上、じつとしてはいらなかった。

「……………すまない、私は先に帰るぞ。家族の危機かもしれないのだ。」

「……………う……………お、おう！なら気を付けてな！こころ辺は彷徨う者が出るつて噂だから、あんまり夜遅くまで彷徨くなよ！」

彼は一瞬、私が何を言っているのか理解出来ずに首を傾げていたが、察したのかいつも通りの言葉で私を送り出してくれた。

私はその場から駆け出し、急いで自宅へと向かう。

今週一週間は父と母は弟を連れて、都会の方へ滞在している。大人にも警察にも頼れない。仮に言ったとしても頭がおかしくなった哀れな若者にしか見えないだろう。

彷徨う者達についてはここに引越してきたときに一回だが出会ったことがある。

当初は、ただの迷信としか考えていなかったが、奴らに出会って初めて分かった。生者が生きている中、彼らは今も現世を彷徨っている。

そして、そんな死者の魂は生きている我々生者の事を常に憎み、妬み、羨んでいる。それ故に夜間に消息不明になる事件が跡を立たないという。

そんな彼らが良く出没するこの街は特に変わっていると思う。

何しろ、住民は夕暮れになると一切外出をしなくなるのだ。彼らに聞くと「古い伝統のようなものだから」と言っていて皆、しらを切つて言う。

皆、彷徨う者達に危害を加えられないためにやっている。そして、その意識はここ最近さらに強みを増したと思う。

例の事件が隣街で発生してから、商店などの閉店時間などが早まったのだ。皆、人が殺されたと分かっておきながら見てみぬふりをし、隠れることを選択する。しかも、本人達はそれを自覚すらしていない。

今回の事件の犯人だつて彼らの被害者であることは明らかのはずなのに、捜索はなんと2日で打ち切られてしまった。

良心の欠片もない連中だ。何処に行っても彼らは変わらない。しかし、これで大人は

頼れないというデメリットはついてきたが、心置きなく一人で探索が出来るというものの。

今まで感じていたモヤモヤした気持ちが一気に晴れた。

彼女には私の家族も愛着を抱いていた。一時期、彼女の両親が亡くなったときも、引き取ることも考えていた程、大切にしていた。

彼女が帰ってくれば、両親も弟も喜ぶはずだ。

早く笑顔になった彼女の顔が見てみたい。私は何度か彼女とは幼いころ会っているが、一度しか笑顔は見たことがなかった。私ともう一度出会えばきっと彼女も嬉しいはずだ。

そう思うと何だか力が漲ってくる。今なら、どんな困難なことでも乗り越えられそうな気がする。

早速、私は全速力で家に向かおうと考え、曲がり角に差し掛かったその時――

ガンツ!!

「うわっ!!」

「キャツ!!」

突然、曲がり角から何者かが飛び出してきた、思い切り激突してしまった。

いや、躓いたというほうが正しいだろうか。私は体制を崩し、盛大に地面に倒れ込んだ。

「ご、ごめんなさい!まさかこんな時間に人がまだいるとは思っていなかったのです!」

「痛てて……:……こちらこそすまない、良く前を視野出来ていなかった……:……:……:ツ  
!？」

顔を上げると、そこには予想だにしていなかった人物が佇んでいた。

なんと、声の主はまだ幼い小学生ほどの少女だった。クリーム色の髪にトレードマークと言つていいほど、とても大きな青いリボン。

ここまで見ればただの一般的な少女だが、注目すべき部位は腕だった。左腕がまるでハサミでそのままスッパリと切断されてしまったかのように、肘の辺りから腕が消失しているのだ。

驚きのあまり、私は差しのべられた手に気付くことが出来ず、まじまじとその少女を見詰めていた。

「君は……………」

「あの、大丈夫ですか。お姉さん……………」

「……………ん？……………ああ、重ね重ねすまないことをしてしまいました。」

私は目の前の彼女の手を取り、起き上がった。

「……………フハハ、情けないものだな。貴女のような女性に手を煩わせてしまうとは。君、名前は？」

そうすると、何に反応したのか彼女は少し顔を赤らめ、まじまじと見詰め返されてしまふ。そんなに引つ掛かるようなことを言っただろうか。ただ、名前を尋ねただけなのだがな……………。

すると、はっとした顔をした少女が慌てた様子で声を掛けてきた。

「あ、はい……………私、ハルです。よ、よろしくお願いいたします。それでお姉さんのお名前は？」

「おっと、名乗るのをすっかり忘れてしまっていたな。私の名は……………」

クレイ、「神谷　クレイ」だ。よろしく頼むぞ、ハル。」

これが、新たなる「深夜廻」の始まりの瞬間だった。

## 第二章 疑惑

「クレイ……………さん、ですか。ず、随分変わったお名前ですね。」

「フハハハ！よく言われる。」

今、少女「ハル」の目の前には大きな声で高笑いを挙げる女の人が佇んでいる。

金髪の「クレイ」と名乗る女子高生はこの恐怖に満ち溢れた町に何一つ恐怖していない。それどころか活気溢れる感情が沸々と伝わってくる。

幾度もこの町は歩いたが、決して怖い雰囲気からは逃れられないと知っているハルは、どうしても不思議でたまらなかった。

そんな彼女が私の反応を見て、急に嬉しそうに高笑いをするものだから、ハルは一步引いた。ちよつとおかしい人に出会ってしまったかもしれない。そうハルは思った。

「で？君は何故こんな夜に一人で徘徊しているんだ？危ないじゃないか。」

それはこつちのセリフなんだけど、とハルは言いたかったが止めた。理由は単純。なんだか面倒臭くなる予感がしたからだ。

「いえ……………特に意味はないんだけど……………。ただ、もうすぐ引越ししちゃうからもう一度……………」

「町を見納めておきたい……………と？」

「は、はい……………」

返事を返すと再び、ハルは態度が小さくなってしまった。

ふむ、と首を傾げるクレイだったが、急に笑顔に戻ってハルに話し掛けた。

「おい、ハル！じゃあ、お前はこの町の構造に詳しいのか!？」

「え!?!……………う、うん、ある程度のことなら分かるけど……………」

「なら私にこの町を案内してくれ！私もこの夜の町に用があるんだ。何分私はつい最近、この町に越してきたものでな。恥ずかしい話だが、道が分からず困っていたのだ。」

突然、頼み事をされ、またまた困惑するハル。だが、押されてばかりもいられないと感じたハルは彼女の頼み事に条件を突き付けてやろうと考えた。

「じゃ、じゃあ、クレイお姉さんも私の行きたいところについてきて下さいよ。それが条件です。」

「承知した。何処へ行くのかは知らぬが、付き添ってやろう。後、ハル。悪いのだが……………」

彼女、神谷 クレイはキョロキョロと目を泳がせた後にむず痒そうに頭をポリポリと搔いた。そして、ハルに対して若干、恥ずかしそうにお願いをしてくる。

「その……………『お姉さん』という呼び方を止めてくれないか？むず痒くて敵わないの

でな……。」

「あ、え？は、はい！分かりました……！！」

「クレイだ。クレイでいい。」

「分かりました、クレイさん！」

どうも納得がいかなそうな表情を浮かべたクレイだったが、気を取り直して再び嬉しそうな表情に戻った。

そして、ハルに対して握手をするように手を差し伸べてきたのだ。

「改めて宜しく、友よ。所で……すつかり忘れていたがお前、何か用があつて急いでいたんじゃないのか？私に勢い良くぶつかってしまったのもそれが原因なのだろう？」

「あっ!?!」

彼女に言われて、ハルは今まで自分が何をしていたのか思い出した。見失ったチャコを追いかけたことを。彼女、クレイと完全に話し込んで忘れてしまっていたのだ。

何をやっているのだろう。早く、チャコを追いかけなきゃいけないのに。

ハルはそう思いながら、急いでポシエットを背負い直して、再びあらぬ方向へと走り出した。

クレイは、いきなり慌てて走り出したハルに驚き、急いで後を追う。

「おい！いきなりどうしたんだ!？」

「ごめんなさい！うちで飼っているワンちゃんが逃げ出したことを思い出したの!！」

「本当か!?!それはすまないことをした!なら、私にも手伝わせてくれ!まだ、この町には不慣れだが精一杯努力させてもらおう!」

クレイは、情熱に火が付くと走るスピードが一段と増した。それどころか、かなり離

れていたハルに追い付くほどまで距離が縮まっていき、いつの間にかハルに追い付いてしまったのだ。

これもクレイ、彼女の困った癖の一つだ。彼女は一度やる気の場合に火が付くとその目の前の事以外の周りが見えなくなってしまう。本来、熱血な性格なのだが、ある人物が消息になっていたため、しばらくの間だけ冷静さを取り戻していただけなのである。

とはいえ、本人はとてつもなく嬉しそうな表情で友、ハルの犬を追いかける。どんな姿かもまだ知らないのにひたすらかけ進んで行く。

少なくとも、ハルの足を引っ張るつもりはないのは確かで、何より彼女にとって嬉しかったことは大事な人が見つかるかもしれないという事実と新しい友が出来たことに違いない。

クレイはしばらく人と関わることを楽しむことを忘れてしまっていた。この感情と胸の高鳴りはきつとそこから来るものなのであろう。

ついに、彼女はハルを追い抜かした。そして、その事に気が付いていない。ただ、ブ

レーキが壊れた暴走列車のように走り続ける。

「ちよつと待つて！クレイさん、速いよ！」

当然、ハルの声も彼女の耳には届かない。クレイの足の速度は留まることを知らず、みるみる引き離されていく。

もちろん、クレイ自身も気付いておらずに走っている。

引き離してしまつて完全に置いてきてしまつたことに気が付いたのは一里ほど進んだ後だった。

周辺を見渡してみても、青いリボンをした少女は見当たらない。

彼女はやつてしまつたと言わんばかりに頭を抱えた。

「くくくくッ、し、しまつた……。私としたことが……。犬の特徴も聞かずに飛び出していっただけでなく、ハルまでも見失つてしまうとは……。まあ、仕方あるまい。あの子は見た感じ、様々な困難をくぐり抜けてきた雰囲気を漂わせていたし、心配する必要はないだろう。」

ハルよりも寧ろ心配すべきなのは、自分だとクレイは察した。金属を引きずるような音が聞こえたからだ。ただの金属音でないことと物凄い殺気を感じ取り、クレイは近くの自動販売機の裏へと身を隠した。そして、顔を覗かせて様子を伺う。

(出たか……………徘徊者め……………！)

彼女の推測通り、日常生活では決して見ることの出来ない形状をした何かが巨大な刃物を引きずって先ほど立っていた場所へ近付いてきていた。

人よりは一回り小さく、一見黒いタイツを纏った男にしか見えないが、注目すべきは体ではなく頭部だった。そして、引きずっている刃物は下手をすれば使っている本人より大きい。切り刻まれてもしたら、人溜まりもないだろう。

(だが……………あれは野球ボールだな……………。知能は低そうだ。)

確かに野球ボールのような頭部の特徴を模している化け物だ。それ故に、目玉と思わしき部位が何処にも見当たらない。そこで彼女は閃いた。音を操って工夫すれば、ヤツ

の気を反らせるかもしれないと。

そこで、彼女は近くにあった手頃の良い小石を拾った。何故かこれを投げると白い犬が飛び出して、トラックに引かれてしまうような気がした。

しかし、それはあくまでも気のせいだ。クレイは気にせずに石を投擲しようとしたその時——

シャキン、シャキン

また、金属音が聞こえた。いきなり出現したため、思わず彼女は再び自動販売機のもの陰へと隠れ、そつと影から顔を覗かせる。

（何だ、あいつ……!?、腕………? いや、ハサミ………!? それにしては随分とまたデカイな……。）

一見、その化け物は拳のような形状をしているかと思われたが、実際にはその手のひらの中に何本か持ち手や口がくつついており、さらに背後に腕のようなものがびっしりと蠢いていたのだ。

クレイはこの状況は好ましくないと悟った。前方には野球ボール頭をした殺人鬼、後方には謎のハサミを持った化け物だ。

まさに前門の虎、後門の狼という状況である。

(不味いな……。八方塞がりだ……。どう切り抜ける……。？！)

だが次の瞬間、彼女にとって奇跡と言える状況が生まれた。と同時に想定外の出来事でもあった。

ジャキン

なんとハサミを持った化け物が刃物を持った幽霊を真つ二つにしてしまったのだ。幽霊同士も殺し合いをするのだろうか、そんなことを考えて始めていたが何にせよこれは逃げるチャンスなのである。

ハサミの化け物は何かを探しているように辺りをうろろしているため、クレイは慎重に自動販売機の裏から抜けた。

「……………ふう、何とか撒いたか。しかし、何なのだ？ アイツ、仲間を真つ二つに切断したな……………。どういう関係なんだ……………？ 化け物同士は味方じゃないのか……………？」

彼女は思考を耽っていると、遠くから何か小さい生き物が吠えているのが聞こえた。彼女は、手を耳に当て辺りの様子を伺う。

(これは……………犬の鳴き声か……………！)

確信を得たクレイは、全速力で声のする方向へと向かう。すると、そこには茶色の毛並みをしたポメラニアンがいた。

「キャン、キャン！」

恐らく、この子がハルの探していたチャコという飼犬だろう。そう目星を付けたクレイは早速ハルの元へ持って行かなければと思い、何とか手懐ける方法を考えた。

チャコは警戒しているのか、クレイに対して吠えるのを止めない。

「ほらほら、大丈夫だぞ。私は危険な人物じゃない。お前を探していたんだチャコ。さあ、主人の元へ帰ろう。」

そうは言っても相手は犬。言葉が通じる道理もない。それに彼にとってクレイは他人だ。そう簡単に懐く訳がない。

どうしたものかと考えていると、彼女はあることを思い付いた。制服のポケットからあるものを取り出したのだ。

それは小さな、剣つるぎの形をしたストラップだった。

「これは……………私の家族が作ってくれた御守りなんだ。白い髪をした私の従妹がな。」

まあ、御守りなのかは甚だ信じがたいが……。だが、これならお前も私に敵意がないことを分かってくれるだろう。」

半笑いで呟きながら、彼女はそつとそのストラップをチャコの元へと置き、一歩下がって様子を見た。

すると、やはり効果があつたのかチャコは暫くそのストラップを臭いを嗅いだり、足でいじつた後にそれを口にくわえてクレイのところを持つてきたのだ。

「そうかそうか！ やつと分かつてくれたか！ 全く手こずらせやがつて……！」

嬉しそうに彼女はチャコの頭をわしゃわしゃと撫でた。

「よし！ ハルを探すぞ！」

「キャン！ キャン！」

もう一度ハルを探すために、彼女はチャコを抱えてすつくと立ち上がる。そして、歩

きだそうとした瞬間。人影が見えた。ユラユラとした歩き方で遠くの十字路を横切る人影。

最初は徘徊者かと思ったが違う。うつすらだったが、それは女の人であることが確認できた。もしかしたら、クレイが探し求めていた人物なのかもしれない。女はユラユラと歩きながら十字路を横切っしまい、視野で確認出来なくなってしまった。

「待ってくれ！お前、もしかして……………」

そして、彼女はチャコを抱えたまま、走り出してしまった。また、ハルにチャコを返すという目的を忘れて。

## 第三章 四つの灯籠と鈴の音

私は暗闇にいた。

私は血縁者を殺した。

それは間違っていないかった。

血の繋がった家族だったけど、あの人は殺されて当然だった。

後悔はしていない。

彼の言うとおり、人とは欠点だらけの出来損ないだった。

どんな生き方をしても汚点というものは生まれる。

そして、それを避けることはできない。

けれど、どんな人間でも避けられない終わりというものがある。

「死」とはいつかは通過する道。避けることはできない。

一人出来損ないの男の死をただ、私の手で早めてやっただけのこと。

世界からたった一つの光を消し去っただけなのに

なのに、何故まだこんなにも私の前には……………

何も見えない、暗く冷たい夜道は続いているのでしょうか。

あれはきつと、あの子だ。あの子に違いない。そう思った私は友の愛犬「チャコ」を抱き抱えながら、彼女を追跡している。

がむしやらに一つの事に集中して回りが見えなくなるのは私の悪い癖だ。自分でもよく理解している。だが、幼いころから直らない。どうしても目の前の事は集中しないと解決できないのだ。

つまり、私は不器用な女なのだ。分かっている、分かっているのだ。だから、あの子にもこんな目に会わせてしまった。

私が回りをよく視認していなかったせいで色々な人に迷惑をかけてしまっている。勿論、今友達になつたハルにもだし、あの子にも。

だが、今そんな困つた癖が役に立とうとしている。確実に今、私は彼女が通りの向こう側を横切つたのを私は見たのだ。

この機会を逃せば彼女を救うチャンスは二度と訪れない。見失ったら終わりだ、と自分に言い聞かせながら、私は無我夢中で追いかけた。ハルと合流することは二の次だ。後でも合流は出来る。

徐々に速度を上げていきながら、人影に追い付こうと必死になる。次第には、チャコの毛が棚引くようになるほどの速度を保ちながら、走っていた。

人影は草むらのような場所へと駆け込んでいった。明かりも持ってきていなかったため、夜道を進むに連れて足元が見えなくなってしまうている。

ここは田舎町。照明灯もそう多くはない。足元で何かに躓かないように、慎重な足取りで進むことに頭を切り替える。

そして、草むらを歩いていくうちに段々と、登り道へと変わり始め、曲がりくねった道を進んで行く。そして、気付いた時には山道へと姿を変えていた。四つの灯籠が寂しく、鎮座しておりまるで廃れきってしまった神社のように殺風景だった。

「……は……山……か？ いつの間にかこんな所へ来ていたんだ……？ だが、まあいい。

兎に角今は、あの子を追いかけることに専念しよう。」

そして、私は再び足を踏み出そうとした瞬間。聞き覚えのある声に呼び止められた。まだ幼い少女の声だ。

「クレイお姉さん〜！待って下さいい！」

後ろを振り返ると、どういう訳かハルが追いかけてきていた。

何故、この場所に私がいると分かったのだろうか。それともただの偶然か………？何にせよ、渡りに船というヤツだ。チャコを返すことができる。

……………チリン、チリン……………

突如、不気味に鳴る鈴の音が聞こえてきた。嫌な予感がする。すると、辺りが冷気に包まれ、私達は一瞬身震いを起こした。

「おい、ハル！待て！止まれ！」

「えっ!？」

ハルは私の指示通りに、その場に立ち止まり、動きを止めた。チャコは平然としているが、それに続いて私も動きを止めた。

沈黙が暫く続いた後、再び鈴の音が鳴り出した。

ペタツ、ペタツ、ペタツ

泥かタールでも踏みつけた時になる生々しい足音が私達の後を通過していった。当然、私達の肉眼では確認出来ない。普通の徘徊者ならば、大抵は灯りがあれば姿を確認することが可能だが、今回は異例だ。

何しろ、今私達は電柱の真下にいるのだ。常連の徘徊者ならばとつくに見えているは

ず。

頬に冷や汗がつたるのを感じる。心臓の鼓動が速くなる。

(怯えているのか……………?この私が……………?)

「ク、クレイさん……………あ、足元……………!」

視線を下側へと向けるとそこにはおびただしい数の人間の足跡があった。しかも、ただの足跡ではない。その足跡は血に濡れ、真っ赤に染まっており、生臭い悪臭を放っている。

「ウツ……………!?!」

思わず視線を反らしてしまった。若干の吐き気も襲ってくる。息づかいもままならなくなってきた。生の血痕というのは、どうにも慣れない。自分にも流れているというのに、普段見慣れないところも体が拒否反応を起こしてしまうものなのか。

チリン……、チリン………

再度、鈴が鳴り、そして止んだ。足元からは血痕は徐々に消えてゆき、気配は完全に去った。ドツと疲れが襲ってきたのか、肺に溜め込んでいた空気を一気に吐いた。私はチャコを手放し、その場に座り込んで尻餅をついた。

「はあ、はあ、はあ………！！！」

「チャコ！」

チャコは喜んで、主人であるハルの元へと戻っていき、ハルも嬉しそうにチャコを抱え込んだ。

「あー、そうだ、クレイお姉さん！クレイお姉さん大丈夫ですか!？」

「あ、ああ……………何とかな……………ハハ。」

地面に座り込んだ私は気弱そうに情けない返事を返した。震えが止まらない。姿が確認できないだけでこんなにも恐怖が増すとは思っても見なかった。

ハルはそんな私を見て、何か難しそうな顔を浮かべた。そして、何か閃いたのか腕をならした。

「もしかして……………クレイお姉さんって……………。お化けとか苦手なんですか？」

「ツ!!ハル!お前はわ、私が幽霊を怖がっていたとでも思っているのか!!?バ、バカを言え!そんな訳ないだろう!私が怖いなどと……………怖いなどと……………」

必死に私は弁解した。けれど身体は正直だったようだ。私の身体は小刻みに震えていた。そして、声もまた震えていたのだ。逃れようのない状況に立たされて、その上戯れ言を吐けばそれはもう言い逃れるための言い訳にしか聞こえない。

私は悟り、素直に自分の気持ち伝えることにした。

「……………恥ずかしい話だが、そうだ。いや、正確に言えば、幽霊が苦手という訳ではない。いつ危険にさらせられるか分からない状況下が苦手なのだ。」

「……………大人ぶつてるクレイお姉さんでも、そんな子供っぽい一面もあるんですね。」

「……………うるさい。」

私は恥ずかしくなり、ハルから目線を反らした。

「ん？何だ？」

目線を反らした先には、何か落ちていた。あの現象と関係があるのか分からないが、一応拾ってみることにした。

「壺？何故、こんな所に……………。さつきまでここには無かったのだが、いつの間に……………」

「なんだろう、何か入ってる気配がしない？クレイお姉さん？」

とハルが不思議そうに壺の中を覗き込んできたので、私も気になって壺の中を軽く覗いてみた。しかし、何も無い。だが、ハルの言うとおり、壺からは異質な気配が漂っているのが感じられる。不気味さが異様に漂っていることから私はこれを「ぶきみなツボ」と呼ぶことにした。

ネーミングセンスダサイとか言ったヤツ、こつちに来い。

しかし、今起きたあの現象は何だったのか。この壺といい、興味が絶えない。この場所では一定の確率でこのような現象が発生しているのか、はたまた偶然なのか。

いずれにしても、この場所。いや、この町はやはり何処か他の町とずれていることだけは間違いない。

あの子を見つげ出すには、もっと情報が欲しい。救い出す手段は勿論、この夜に関する情報も必要になる。ならばハルとチャコにサポートを頼みながら、渡り歩く術を身に

つけるしかない。

「さあ！まずは私の用事を済ませよう。そういう約束だよ、クレイお姉さん。」

「そうだったな。よし、さつさと用事を済ませて私の頼みを聞いて貰うぞハル。」

「うん。クレイお姉さん。あ、いや、クレイ！」

彼女は呼んで欲しい呼び方で私を呼んでくれた。私は嬉しくなり、思わずにやけてしまう。頼もしい相棒だ。これからも宜しく。 私は嬉しくなり、思わずにやけて

「あ、もう私を置いて何処かに行かないで下さいよ。探すの大変だったんですから。」

「……………以後、気を付けます……………」

《  
b  
l  
u  
r  
:  
5  
》  
《  
/  
b  
l  
u  
r  
》  
《  
v  
i  
b  
:  
i  
》  
《  
/  
v  
i  
b  
》

## 夜更け

### 第四章 コトワリ神社

怒りの矛先は人間に向けろ。

暗闇の奥で彼がその言葉をいつていたのは記憶に新しい。

そして、それは自分も例外ではない。

私は環境が生み出した化け物だ。

この記録を読んでいる人がいるならば、貴方は何を言っているんだという気持ちに陥

るでしょう。

しかし、現に彼のような憎悪の塊に犯されても最初からおかしくなかった。

そんな状況で私は育った。

支えてくれる人は誰もいなかった。

彼らが私を悪の化身に変えた。

世の中というのは非常に理不尽に構成されている。

弱肉強食の理。

俗に言う大量殺人事件の犯人は大半が環境下が最悪な者か、考え方が元から下衆な者だ。

だけど、私にとってはどっちが死のうと知ったことじゃない。加害者も被害者も全て同類。関係ないとはいえ、罪がないとも言いきれない。

愚かな愚民どものせいで、私達の血筋は長い間苦しみ、痛め付けられてきた。

だが、私はチャンスを与えられた。この機会にもっと消す。もつともつと、消し去ってやる。

死者がどれだけ私のことを恨み、憎み、嫌おうとも構わない。

どっち道奴らは所詮、敗北者。死んでしまったということは即ち、人生……賭けに負けたことに等しい。

正にこれこそ「死人に口なし」ということなのでしょう。貴様達にとにかく言われる筋合いはない。

---

「ハル、先に用事を済ませることが条件だと言っていたが、一体何処へ行こうというのだ

「？」

「神社。もうボロボロになっちゃってたけど、まだ神様があそこにはいるから。」

「??????」

彼女は何を言っているんだ、と首をかしげるクレイ。その場所は我々やハルにとってははととても大切でとても印象深い所なのだが、初めて向かうクレイにとっては疑問しか残らない。

大切な用事だと言っていたから、先に済ませようと意気込んでついできたのに、目的地がまさかの神社だったとは。それに「神様」という単語が妙に引く掛かる。

「神」などこの世にいるのか？あれは、概念的な象徴ではないのか？いや、私が関わってきた宗教は欧州で多く布教されているものだから、神社のそれとは勝手が違うのかも

れない。

あくまで別物と考えよう。それに今更、神がどうこう言っていられる状況でもないんだ。

暫く徒歩で進み続けると、絵馬と神社と思われる建築物が姿を表した。と言つても鳥居が我々から離れた場所に設置されていたため、裏側から侵入したことを私は悟った。

「しかし、随分と脆くなっているな……………」

長い間、水に浸かっていたかのように所々の木造が朽ちている。柱に触れてみただけですぐに分かった。それに辺りの平地が苔まみれで水分を吸収した土がぐちよぐちよと生々しい足音を立てる。

最近雨が全く降っていない。ここだけ雨が降ったとも思えないし、何故濡れているのだろうか。まさか、ここがダムの底でもない限りそんなことはないはずだ。

石畳も常識ではないような構造をしている。式神や藁人形にも似た人形の形を模している。人がここで神様に生け贄にでもされて、両断するなんていう物騒なことをしていたのだろうか。

何にせよ、長い間放置されていた神社というのほろくなものではないのだろう。

私とハルはお賽銭箱の前にくるとそこで立ち止まった。ハルはここにお参りするためにここにきた、今まではそう考えていたが私の思惑は悉く打ち砕かれた。

「いつ?!ハル!何だその真っ赤な鉢は?!」

ハルがポシエットから取り出した鉢は尋常なものではなかった。何しろ、血に濡れていて人殺しを繰り返したかのように紅に染まっていたからだ。そして、普通の鉢よりも遙かに大きい。ポシエットいっぱい詰まっていたようで、取り出した際のポシエットはすかさずかになっていった。

「これを神社に返しにきたの。」

そう言い残し、彼女は賽銭箱に100円を乱雑に投げ入れた。だが、反応が一切ない。まあ、普通ならば当たり前な光景だが、この町では寧ろ何も起きないほうが珍しい。

ハルは再度、お賽銭を放り込んだ。今度も反応は一緒だった。何も起きない。静寂がただただ私達を包み込むだけ。

「なあ………………。私が言ったことでもないのだが………………。もう、この神社に神様は宿ってないんじゃないのか？」

「そんなわけないよ！必ずいる！だってまだ……………約束を果たしてないんだよ！」

「ツーす、すまない。」

いきなり怒鳴られてしまい、怯む私。普段なら不良相手でも身震い一つ見せないはずなのだが、彼女の覚悟というか信念の前には思わずたじろんでしまった。

(フツ、本当に面白い少女だ。見た目は幼いが私やそこらの不良よりもよっぽど肝が座っている。強い女だ。……………私にも彼女ほどの覚悟があればもっと早く、あの子を救えたのだろうか……………)

ハルに対する賞賛と己の反省点を振り返りながら、何か起きるまでの間、ぼんやりと絵馬を眺める。ざっくり解説してみた所、この神様は縁を断ち切る役割を担っているらしい。

願い事の内容が、悪縁を断ち切ってほしい、などと人との縁を切りたいというものが

記されている。語尾には必ず感覚を開けて、「もういやだ。」と付け加えられていた。

一見、普通に祀られていた神社に見えるが、よく見ると随分と物騒な話題も書き記されている。「あいつとの縁が切れますように。」ここまででは良かった。だが、次からの文が常軌を逸していた。

「……………人というのは、実に哀れだな……………」

私は苦虫を潰したような表情を浮かべる。あえてここに記しておくのは止めにしよう。思い出しただけで吐き気がしそうだ。幾ら願いたい事とはいえ、限度というものがある。憎悪の塊だ。縁を断ち切るだけでなく、他人の不幸をも願うとは。腹立たしく、実に醜い。

私は初めて、彼女が日頃言っていたことをやつと理解した。こういうことを彼女は毎

日考えていたのか、と。

「ようやく、お前に彼女の想いが通じたな。コトワリが犠牲になった甲斐があつたつてもんだ。」

「ああ……………そうだな……………ツ!!? 誰だ貴様!？」

気付かなかった。金髪の男が横に何の音もなく忍び寄っていたものだから、つい驚いてしまった。ハルは気付いていないのか、無言でお賽銭箱の前で棒立ちしている。

(ハルはコイツが見えていないのか!?)

「やあ、クレイ。会えて嬉しいよ。……………ん、私が何者かつて? ただのしがらないオジサンだよ。そうカツカすんな。」

「そういう意味じゃない! 貴様、一体何処から現れた!? 何故、私の名を知っている!? 答え

ろ！」

舐めた野郎だ。見た目は随分とふぎけた風格なのにどことなく邪気が溢れ出ていて、異様な雰囲気をつけている。

実に不気味なヤツだ。もしかして、あの子はコイツに何かされたんじゃない?!

「いちいち質問の多いヤツだな。まあいい。教えてやるよ。まず、私はここにはいない。遠くから使ってお前の脳内に直接、語り掛けているんだ。分かるか?お前の考えてることとが全部筒抜けってことだよ。」

「何だと!?!」

「そ。だから、お前があの子のことを考えていたことも全部お見通ししてわけ。あ、でもだからって私はお前の敵ではないからな。ただ、少しからかいに来ただけだ。」

「なら今すぐ私の前から失せろ!あの子について何も出来ないお前に用はない!」

「おお、怖い怖い。どうやら予想以上に従妹に溺愛してるようだ。」

煽りを言い残し、彼は頭の中から姿を消した。

(何だったんだ………今のは………。)

ただの徘徊者だと思いたかったが、私の推測通りならば、彼ら死者はきつと理性が正常に保てないのであろう。殺されたならば、尚更だ。凄まじい憎悪にみまわれて、周りが見えなくなつて行く。

だが、今のヤツは頭がまともだっただけでなく、私を惑わそうとした。このような力を徘徊者が使えるとも思えないし、おそらく別のナニカであると考えるしかない。いずれにせよ、今の男は何か目的があつて動いている。これだけは断言できる。

「クレイさん? どうしたの?」

ハルが何事もなかったように、話し掛けてきたので、クレイは微妙な反応しか返せな

かった。

「ん、ん？あ、ああ、何でもない。少し考え事をしていな……………」

「……………」

ハルは何でもないなら、それでいいと思ったがそうもいかなかった。何故なら、彼女に余計な心配を掛けまいと、平気そうな顔を浮かべているクレイの瞳の奥深くに何か心に決めたときに宿る小さな炎が漲っていたからである。

## 第五章 コトワリさま

暗い……………

虚しい……………

身体中が痛い……………

ここはどこですか……………？

私は一体……………

早くここから出ないと……………

何か、何か……………大切な……………

約束があつた気がする……………

……………何も思い出せない

何で、何で、何で

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで

んでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
んでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで  
ンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデ

もう、休んじやつてもいいのよ。

……………？ どういうことですか……………それは？

誰もいない。退屈な空間だが、それは自由に動ける証拠でもあるんだ。

……………自由

ここなら好きなことが幾らでもできるのよ。永遠に。死ぬ必要もない。

……………永遠……………死……………。

……………どうした？あれだけ欲しがっていた自由がやつと手に入ったんだぞ？

そうやってただ、踞ってるだけでいいのか？

ほら、立って。一緒に行きましょう。

色々な声がなりやまない。頭にガンガン響く。苦しい、辛い、熱い、痛い。

あ、ああ………手が、私の手が………赤く、染まっっていく………

今にも壊れてしまいそう。も、もう………いや

もういやだ。

ジャキン

金属音が響いた瞬間だけ、赤いリボンを付けた女の子が見えた気がした。

---

「さて、ハル。何が起ころと思う？」

私達は未だ、神社から動いていなかった。いや、動けていなかったのほうが正しいか。ハルが怪しげな鍬を祭壇(?)に対して捧げた後、さつさとこの場を離れたかったのだが、鍬を返してから神社に何か異様な空気が立ち込め始めた。

なので、離れようにも内から沸き上がってくる好奇心に勝てず、何かが起こるまでここで待つことにした。

ハルが話してくれた内容によると、彼女はこの神様にあつたことがあると言つていた。正直、本当にそんなものが存在しているかどうかは、甚だ疑わしいところだが、氣になつてしようがない。何しろ、相手は「神」なのだ。確かめざるを得ないだろう。この状況では。

きつと、あの子だつてそうする。確かめるに決まつてる。

ハルは私の問い掛けには反応せず、じつくりと鋏の持ち主を待ち続ける。無視されても私は気にしなかつた。何故ならば、未知との遭遇が体験できる絶好の機会かもしれないのだ。胸が高鳴るといふもの。

すると、祭壇に立て掛けてあつたはずの鋏が突如消え、すぐ近くに空間から裂け目が出現した。そして、瞬きも許してもらえないほどの速度であの巨大な鋏を持った化け物が現れたのだ。

「ツ！お前は……………!？」

「……………コトワリさま。」

ハルがポツリとヤツの名前らしき単語を呟いた。コトワリさまか……。ふむ……。縁を断ち切る神様だとしたら、少し予想していた姿と違っていたな。さつき、襲われたときにヤツは縁結びを断ち切るどころか徘徊者<sup>徘徊者</sup>を物理的に真つ二つにしていた。

あのときは偶然にも居合わせたため、助かったが、それにしても姿と役割が一致していなくて分かりにくい存在だといえる。

だが、同じ化け物でも不思議なくらい心拍が落ち着いている。敵対心がないからと言われれば、そうなのだが、何故だろう。

しかし、こちらに敵対心がないからと言って、向こうにも敵対心がないとは言いが切れない。コトワリさまは、裁ち鋏をジャキジャキ言わせて、戦闘態勢に入っている。

そして、容赦なく私達に向かって斬りかかってきた。

「ハル！」

私はハルを咄嗟に抱え、ヤツが攻撃してきた逆側に横転した。間一髪、回避することができた。一か八かの賭けだったが、上手くいった。

だが、コトワリさまは私達のほうに刃を向けてこなかった。寧ろ、さつき私とハルが立っていた方向に再び向き直っている。

(アイツ、何故私達に追撃をしないんだ?)

コトワリさまの目線(?)の先に視線を向けると、そこにはストラップが落ちていた。見覚えのあるストラップ。私はドキッとした。まさか。そう思い、ポケットに手を突っ込んで、入っていたはずの物を探す。しかし、案の定そこには入っていないかった。

急に冷や汗が滴る。あれだけは駄目だ。ヤツにやるわけにはいかない。何とか取り戻そうと躍起になるが、既に遅かった。

ジャキン

手を伸ばすことすら叶わず、今まで大事に扱っていたストラップを両断され、バラバラにされてしまった。コトワリさまは満足したのか、再び時空の狭間へと消えていった。

「クソッ！ヤツめ……………！壊すだけ壊して逃げていっただと……………！」

慌てて回収するも、やはり人形は無残な姿へと変貌していた。明らかに切断した回数  
は一回の筈なのに、手足が綺麗にもぎ取られていたのだ。壊されただけでなく、私に精  
神的苦痛を仕掛けてくるとは。とんだ神様だな。

「クレイさん……………。それ大切なものなの？」

「……………ああ、そうだな…………。これは従妹に貰ったものなんだ。『お前をたとえ見失つても、これだけは失くさない。安心しろ。』と絶対に手離さないと決めていたんだが、何一つ守れずに両方とも失ってしまったのでな…………。フフ、滑稽な話だろう？ 笑いたきや笑え。私は構わない。」

「笑ったりしないよ。絶対に。」

「……………！フハハハッ……………！お前は優しいな。しかし、そんなに私に同情しなくてもいいのだぞ？ 私達はいさつきまで他人だったんだ。そんなに感情を入れ込む必要

は――

「私も持つてるの。大切な物。」

いつになくハルは真剣な表情になり、髪に結んであったリボンをほどいて、私に差し出した。

「お、おい……………これは……………」

「私の友達だった人がくれたの。名前はユイ。大事な友達。」

私はなんとなく察してしまった。そうか、ハルはきつとこの町を去るんだ。表情からして、私を励まそうとしてくれてはいるのだが、どこか後ろめたいところが引っ掛かっていると見られる。

恐らく、友達は何らかの形で別れることになったのだろう。それで名残惜しくなって

最後の思い出の為に生まれ育った町を廻る。でなければ、少女が一人で出歩いている説明がつかない。気持ちは分かる。私もそんな状況下に立たされれば同じ事を繰り返すだろう。

自慢じゃないが、私は人の動きや反応に敏感なのだ。そうでなければ、あの子がストレスで震えていたことに気付くことすらなかったであろう。まあ、人の動きに敏感でも、結局大事な人は救えてないのだから。

「そうか、ハル。お前も色々大変だったのだな。少し安心したよ。ここにも私の仲間がいたとはな。それで……………その友達とは仲直りは出来たのか？」

「……………うん。会えなくなる前にお礼が言えて良かった。」

「さて、そろそろ動くとしようか。ストラップは後で修繕すればいいさ。」

手に握りしめたまま、歩きだそうとしてもハルはその場から動かさずにじっとそのストラップを見詰めていた。

「ん？どうした、行かないのか？」

「何か挟まってる……………？」

「本当か、ハル？」

ハルに言われた通り、ストラップをもう一度確認してみると、切られた隙間に確かに何か挟まっている。これは紙切れか……………？何故、こんなところに挟まっているんだ。よく見ると、紙には殴り書きで何か書かれていた。

---

助けて、姉さん。

「クレイさん、これって……………」

「間違いない、あの子の文字だ。」

クソツ、何て事だ。従妹が必死のSOSを表しているのに、何でこんなところを彷徨いているんだ私は。一刻を争う事態だというのに、悠長に探索している場合じゃなかった。

私はその場から駆け出して、探索を開始しようとした。がハルに腕を掴まれてその衝動に刈られた気持ちは一気に落ち着いた。

「待ってよ、クレイさん！また置いて行かないでよ！それにその従妹さんいるところ分かるの!？」

「あつ……………全く考えていなかった……………」

「う〜ん……………じゃあ、まずは図書館に行ってみようよ！もしかしたらその従妹さんがいるかもしれないし。」

「図書館だと？」

その場所を聞いた時は最初、何故そんな見当違いな所を探さねばならないのだ、と思っただが、確かに一理ある。この街の図書館は大きいほうではないが、古い書物などは数多く眠っていると町の人から聞いたことがあった。

あの子が行方不明になった原因が分かるかもしれない。そうなると探索方も変わってくる。

「フム、ならば一刻も早く向かおう。情報を仕入れることは確かに救出に繋がるかもしれない。」

「うん、じゃ行こう……………あ、そういうば、その従妹さんの名前を聞いてなかったけど」

「何て名前なの？」

う。そうだ、探すべきの対象の情報を伝え忘れていた。丁度良い。この際に教えておこ

「そうだな……彼女の名前は——

ルキア。  
神谷  
ルキアだ。

## 第六章 図書館にて

「ここは……………どこでしょうか……………」。

見渡す限り、辺りは多くの木が佇んでいます。

どうやらここは森のようです。

「うぐっ……………。頭が……………」。

頭痛が走り、つい頭を押さえる。ズキズキと痛み、頭が破裂しそうなくらい痛いのです。それに記憶が曖昧になっていて混乱状態にも陥りそうです。

ええと、神社に潜む化け物を撃退して……………あれからどうなったのでしょうか。

どれくらいの時が過ぎたのかわからない。

………！こともさんは………!?

あの子は大丈夫なのでしょうか。

とにもかくにも、まずは情報が欲しいところです。状況が全く把握出来ていない。

すると、近くからガサガサと草むらが蠢き始めた。背筋が寒くなるのを感じる。

心臓もそれに合わせ、鼓動が加速する。

また真夜中に鬼ごっこをしようというのですか。

いいでしょう。

かかって来なさい、それほどまで私を殺せるものなら殺してみなさい。私は友を見つ

けるまで歩みを止める気はない。

いくら身体を引き裂かれようとも、切り刻まれようとも。

私はもう、目の前の事実から逃げたりしない。

そして、いつでも襲われても良いように身構えたその時、巨大な赤い裁ち鋏が大きく口を開いて私に襲い掛かってきた。

---

神社から歩きだし早数分。私達は商店街付近にやって来た。ここまで来るのに随分

と苦勞した。何しろ水没した村をまるまる越えてきたのだ。

沼に足にとられるは、氣味の悪い反吐がでそうな形をした徘徊者に追い掛けられるわ、おまけに配水管を通らされた。ヌメヌメしていて、生臭かったので、綺麗好きの私にとっては辛いものがあつた。

中には鼠どもが大量にいたし、しわくちやの老人みたいな地面を這う赤ん坊の徘徊者。それに腹部に人の顔を宿した巨大な沢蟹が徘徊しているのには驚かされた。

蟹の頭部があつてその下に人の顔。某RPGゲームの四作品目に出てきそうな雰囲気だつた。

そして何より驚きだつたのが、地震が配水管の中でのみ発生していたのだ。

超自然現象、いわば徘徊者どもにはもう慣れたが、自然の災害だけは慣れることが出来ない。というか慣れてはいけない。

慣れてしまっただけでいいというときに困るからだ。理由は単純明快。命の信号を受け取れなくなってしまうからだ。咄嗟の判断力が鈍くなる。非常事にそれだけは不味い。

とまあ、こんな感じで道中散々な目にあつた。

そして、今はこの廃墟と化した商店街にいるわけだ。住んでいる住人は当然いない。この場にいる人間は私達だけだ。チャコもいるが、徘徊者に対抗出来るとも思えないのでノーカウントで。

「しかし、随分と遠い道のりだな……………」

この町を狭いなどと思っていたが、そんなことはなかった。それほどころか、かなり広い。私が元々住んでいたところは都心部で交通手段といえば、いつも鉄道だった。

当然だがこの町に鉄道なんて便利なものはない。歩きだけで、こんなに探索をしたのは生まれて初めてだ。

悪態をつくようなことを口走ってきたが、悪いことばかりでもない。

地下水路では退屈な空間が続いていた。けれど水路を脱した後、普段見慣れている町が新鮮に見えた。

暗闇に包まれ、どこか悲しげな町。昼間とは一変した町。私はこんなところに住んでいたのかと改めて思い知った。

身の回りだけでこんなに面白いことが転がっているとつくづく世界は広いと感じさせる。だがそれと同時にルキアはこんな憂鬱とした場所に取り残ってきてしまったという罪悪感も彷彿としてくる。

ハルはそんな何処までも続く暗黒の街をもものともせず、ドンドン進んでいく。先程から辺りを見回す頻度が増しているため、おどおどした様子は感じられる。けれど何処か勇敢だ。誰かが彼女に取り付いているかのように。

目的地である図書館に私を案内してくれているその姿は何処と無くルキアに似ていた。

あの子は確かに臆病者だった。いつも何かに怯えていた。他人が通りかかる度に、いつも私と弟の背後に回って隠れようとしていた。それほどの小心者。

しかし小心者には小心者なり意地がある。彼らの警戒心は人一倍強く、危機を察知しやすい。いち早くに対策を練ることが出来る。影に潜むことに徹することで生きていく。ルキアにもそういうところがあつて、現に何回か弟を含め、助けて貰ったことがある。

我々のような安定した性格を持ったものには分らない感覚だ。

故に何かしらの覚悟が決まったとき、より強く成長できる。

この暗闇を歩くのに、最も適した力だ。臆病でもなければ、一瞬にして呪い殺されてしまふだろう。抵抗できないものに抵抗しようと試みても無駄だということを彼女は教えてくれる。

「……………図書館ってこんなに遠くにあつたか？」

しまった。つい弱音を吐いてしまった。

あまりにも長い道のりで自宅の付近も越えてきたのに一向に到着する気配がないため、私の気持ちに限界を迎えていた。

「この町の端つこにあるから。ほら、見て。」

そうとうと彼女はスカートのポケットから丁重に折り畳まれた用紙を取り出し、私に見せてくれた。

それは地図だった。いかにも子供っぽいクレヨンの手書きでこの街の地図が描かれていた。正直、高校生の私としては見辛いものがあつたが、道のりはかなりの確だった。

重要場所にはしっかりと付箋で記されているし、何より今いる細かい道まで記されているのだ。私には到底真似できない。地図を今すぐ書けと言われても、きつと乱雑になつてしまう。

「そ、そんなに私の地図が気になる？」

またまたやつてしまった。気が付くと私は、凄く真剣な形相でただの地図を睨み付けていた。

はつとなつて私は手を上げたまま、慌てて後退する。

「す、すまん！い、いやほら！良く書けているなと思つてだな！」

「……………？あ、それより見て！図書館に着いたよ！」

ハルが指を指しながらそう発言していたので、刺された方に目をやると、確かにそこには図書館がこじんまりと佇んでいた。

あまりにも町の外れにあるので、その姿は何処と無く寂しそうにみえる。

しかし問題はここからだ。現在、夜の8時過ぎ。当然ながら図書館が開放されている訳もなく、南京錠が掛けられた巨大な扉が私達の前に立ち塞がっている。開けてくれる気配は一切ない。

かといって南京錠をペンチやバールで叩き壊す訳にもいかない。それは不法侵入と器物破損罪になってしまいうし、これは困った。

私は顎に手をあてながら、思考に耽る。すると、ハルが扉の近くから錆びた脚立を持って、それを小窓の側に立て掛けた。

「はい、これで入れるよ」

「悪いな、ハル。………不法侵入になってしまうが致し方ない。早めに調べてさっさと立ち去るとしよう」

脚立を上がり、小窓からよじ登って侵入すると、意外にも明るい光景が広がっていた。明るいといってもたかが知れているが、電話機や非常用のために付けっぱなしになっている電気スタンドなどのおかげで懐中電灯いらずだ。

「で、何を調べるの？クレイお姉さん」

「そうだな……………この町で起こる怪奇現象について調査したい。聞いた話だと従妹の母親はどうやら巫女の家系だったようなんだ。関わりがないとは言い切れない。」

「巫女って……………神社の巫女さんのこと？」

「ああ、率直に言えばそうだな。よし、行くぞ」

真つ暗闇の雰囲気にも包まれた図書館を進む私達。歴史などに関係している資料は恐らく、この階にある。あの家系の努めとなる話は割と有名な作品だ。密かに映画かなんかに取り上げられて、上映されていたりしたこともあった。確か

「売り上げは雀の涙ほどだったか……………フツ」

「ん、どうしたの？」

「ああ、悪い。一人言だ、気にするな。」

という訳でその映画に取り上げられた切っ掛けになつた題材が確か絵本だったはず。子供の本が分類されている棚にないだろうか。

途中には、徘徊者らしき思念体はちらほらと見掛けた。奴らはずっと棚の方を見て俯いており、こちらに見向きもしない。

だが、少し大きな音を鳴らしたときに、少しだけ此方をギョロリとした一つ目で睨み付けていた。

やはり図書館ということで、大きな音を立てない限り、こちらに興味を示すことはない。静かに読書でもしていたのだろうか。

だが奴らの蜘蛛のように尖つた手腕では、本どころかまともに物を取ることもかなわないだろうに。一体どのような思いをして逝ってしまったのだろうか。

徘徊者のことを考えるのはやめておこう。考えれば考えるほど矛盾している箇所が数多の数浮かんでくる。

そんな彼らに注意を向けつつ、図書館を回っていると、無造作に本が散りばめられている場所にたどり着いた。

山積みになった本は全て昔話だった。あらゆる有名どころの童話が題名に刻み込まれている。私はそれらを音を立てないように漁り、目的の本を探し始めた。

その中には摩訶不思議な物語もあった。例えばこの「泣く石」。とある男が泣いている大きな石を一生懸命運んでいる絵が描かれている。一見すると意味が分からないが、このような話は一般には出回っていないので、興味深い。そして、何より発想が面白い。

そんな面白そうな本をチラ見しながら、本を漁っているとまた面白そうな物を見つけた。『小さな小さな蜥蜴』とかげというタイトルの絵本だ。表紙には蜥蜴トカゲというより、赤い鯢サシユウウオのような生物が乗せられている。

私とハルは興味本位でその本を覗いてみた。

何故かは分からない。ただ、単純な好奇心が私達を引き付けたのだ。

---

むかし、むかしあるところに

1ぴきの元気なトカゲさんがいました

そのトカゲは森に住んでいました

トカゲさんは森が大好きでした

小鳥さんがさえずり、お花は咲き乱れ

近くにはキレイな水場もあります

とても幸せに暮らしていました

しかし、あるとき

突然森が焼かれてしまいました

一つのひかりが天から落ちてきたのです

そのひかりはたった1秒ほどで

森の全てを焼きつくしました。

## 第七章 黄金の影

グツ……………何とか、あの鉄の化け物から逃げ仰せましたが

……………また見知らぬ地へと出てしまいました。

今、私が佇んでいるところはどうかやら丘の上。

この町並みが一目見ただけで一望できます。

私は目を凝らしながら、町を見渡す。

私の住んでいる町は廃工場が存在するので、このような高台ならば本来、見つけるのは容易なはず。

しかし、何処にも廃工場らしき大きな建物は見えない。

弱りました……一刻も早く帰りたいのにこれでは何もできません。

そう思った矢先、私は妙な生き物を見ました。

それは蛇。小さな蛇。

ですが、そこら辺にいるシマヘビやヤマカガシのような普通のものではありませんでした。

その蛇は角が生えていた。

まるで神話に登場する怪物のような姿をした蛇。

舌をピロピロ出しながら、此方の様子を伺っている。

何が目的なのでしょう。狂暴そうな見た目とは裏腹にやけに慎重な性格をした蛇で

す。

すると、蛇は私を見詰めた直後によりよると丘を下り始めた。

不思議と私もその蛇と同時に足を進めた。

正直、怖いという気持ちはあつた。

けれど、あの蛇は私に起こったことを何か知っているのかもしれない。

蛇は私を何処かに導くが如く、迷うことなく街中を進んで行く。

そして、見えた。

赤いリボンを身につけた女の子が。

私の探している人かもしれない。

私は夢中で走り出した。

ひたすらその子に追い付こうと。

しかし、その子は近付く処かドンドン遠ざかっていく。

誰でも構わない。

人に会いたい。

私は今まで通ってきた道を振り返った

しかし、そこには先程までずっといた蛇は

もう何処にもいなかった。

「何だ、この絵本は……………」

可愛らしい絵柄とは裏腹にとても残酷な内容が綴られている。

一瞬にして森を焼きつくした光……………。それは我々、日本国民が決して忘れてはならない光なのかもと私は悟った。光の正体は長崎という発行場所と年代で分かった。

背筋がゾツとし、私は静かに元の場所へ絵本を戻した。ハルはそれ以前にこの図書館の雰囲気には怯えきっていて、途中から絵本を読むのを止めていた。それは不幸中の幸いだったかもしれん。

何故なら、ハルみたいなまだ小さな女の子が見るには内容が過激だったからだ。私で

さえも胸が張り裂けそうになり、罪の意識が雪崩のように積み重なっていくのを感じる。読むのは大人になってからだろう。いや、大人でさえこれは少し……。

もし、この蜥蜴の物語が実話を元にした話だとしたらこの絵本の彼は我々を恨んでいるのではなからうか。ルキアも同じ事を思っているのではないだろうか。私を恨んでいるのでは。そう思うと怖くてたまらない。

私が徘徊者を怖がる理由は単純にその存在に恐怖している訳ではない。怖いのはその恨みの矛先だ。無差別なのか、そうでないのか。目的によって対応の仕方は変わってくる。

顔から血の気が引いていくのを感じる。どうしよう、ハルがその怒りの巻き添えとなったら。あの子、ルキアは人を既に殺めてしまった存在だ。次は躊躇なく私達に襲い掛かってくるかもしれん。私だけならばいい。これは我々家族同士の問題だ。

しかし、ハルはただ私の勝手なわがままに付き合ってくれただけだ。巻き込んでしまつては迷惑だろうし、個人の尊重を無視している。タイミングを見計らつて別れない

と行けないかもしれない。

「ねえ、クレイお姉さん……………。早くここから出よう……………。ちよつと怖くなってきたよ……………」

とハルが恐怖に耐えきれず、弱音が漏れ始める。その気持ちは分かる。確かにこの場所以外の風景とは一変している。月夜の灯りはなく、ハルが首から下げている懐中電灯がなければ足元もまともに見えないような暗黒だ。

しかしまだ私は帰らない。いや、帰れないのだ。もう頼みの綱がこれしかない。ルキアの情報は何処にも残っていない。

ハルやルキアの足取り探しに手間取り、冷や汗が頬を伝う。

そんな時、一つの本が目の前に転がってきた。本棚から落ちてきたのか……………？気になって手に取ると探していた題名が目に飛び込んできた。

白い髪の巫女が燃える化け物を封印するという物語だ。

「……………あつた……………」

「お姉ちゃん……………も、もう無理だよ……………」

はつと顔を上げると面に穴が開いた化け物に囲まれていた。あまりに長い時間留まっていたため、痺れを切らした怪物達に睨まれていたのだ。

私はその本とハルを抱え、その場から駆け出した。

がむしやらに走った。足がもげそうなくらい。怪物も図書館で騒音を立てた私に激怒し、鋭い触手を突き立てながら追いかけてくる。

どう登ったのか、私は窓からいつの間にか外に脱出しており、いつもの冷たい夜風が私達を包み込んだ。月明かりが夜を照らし、萎れた勿忘草が風に揺られている。

ハルを下ろした後、私は不安と焦燥感に襲われ、正常に立っていることが出来なくなった。一気に脱力感が湧いてくる。本を手から落とす、ガクツと膝を着いてへたれこんだ。

これで何回目だ？ハルを危険に晒したのは。この旅は自分だけの問題ではないというのに……………。

「ハル……………すまない。これは私のせいだ……。私の……………」

「どうしたの？……………そんな落ち込むことないよ。……………まあ、ちよつぱり怖かったのは本当だけどね」

「……………怖いんだ」

「え？」

「私は……………自分が知らない所で人を傷付けていないか恐ろしいのだ」

「……………でも」

「だってそうだろう!? 身勝手な都合で他人であるハルを巻き込んで! 危機に晒してばかりいる! ハルも分かっただろう!? 今に至るまで君を何度危ない目に会わしたか!?! .....無理やり私に付き合うことなんてないんだぞ、ハル。私はこの通り自分勝手な女だ。」

「.....でも、私はね。クレイさん。」

「貴方のこと、もう友達だと思ってるよ」

「ッ!?!」

何故、そう言ってくれるのだハル。こんな暴走列車みたいな女を『友』だと.....!!? 正直、ハルとは釣り合わないときえ思っていたのに。

学校でも私はそんなヤツだった。一人で突っ走って、周りの状況など気にも止めな

い。だから、重役を押し付けられることが増えた。率先してやってしまう癖が仇となっている。

実際、私は高校の校風委員長だ。でも、やりたい訳ではなかった。学年の生徒からの立候補によって決められたことだった。忙しくなってしまった。いつしか、ルキアの事を気に掛けることすら出来なくなるほどまでになってしまった。

ハルはそんな私の過去の事は知りもしないだろう。だが、大体察しはつくというものの。私には分かる。ハルはそんな私の性格を見破ることくらい容易であると。

それを知つてなお、私のことを友だと言つてくれるのか、彼女は。

「何故、そこまで……………」

「言おうとしたんだけどね。私、もうすぐこの街を引っ越すんだ」

「それなら尚更……………」

「友達がいたって前に言ったよね。その人……………もう死んじやったんだ。とつても悲しかったし、お別れなんて嫌だった」

「……………」

「大切な人を失う気持ちがよく分かるんだ。だから、危なっかしいクレイさんを放つておけなかった」

「フフ……………」

これじゃどつちが守り手か分からないな。まあ、今更か。よく考えてみれば、ルキアにも同じ様なことされてたっけか。弟と一緒に無茶してその度にルキアが母を連れて迎えに来ていたな。

こうなるとしんみりしているのも馬鹿馬鹿しく思えてきた。

謝るなんて今に始まったことじゃない。ここまで来たら連れ出してやる。待たせる

な、ルキア。お姉ちゃんが迎えに行くぞ。友達も連れていくからな。何度決意したか分からぬが、ルキアを救う、そう思うと勇気が沸いてくるのだ。

「よー！」

私は活を入れるために、頬を両手で叩きスツクとその場に立ち上がった。ハルは驚いたのかたじろんだ様子で、尻餅を着いた。

「フハハハハハ！ハル！迎えに行くぞ！お前と私の二人で！ウハハ！」

いつも以上に元気になった彼女を見て、ハルも笑みが漏れた。クレイはこの暗く悲しい夜の雰囲気をも吹き飛ばしてくれる。そんなように思えた。

「あ！クレイさん！」

「何だハル！そんな所に突っ立っていると置いていくぞ!？」

「本、忘れてます！」

「あ……………」

徘徊者《彷徨う者》も変な女がやってきたと囁いているようにざわつき始めた。萎れた勿忘草に元気が戻ったような気がした。

## 第八章 赤と青の狛犬と妖怪

あの赤いリボンを身につけた女の子を見失ってしまった。

もう道標がない。

後にも引けないし、未知の道を進むしか術が残っていない。

そのために、

ひたすらあの子を追いかけるしかない。

しかし、まるで砂漠で蜃気楼にでもあったかのように

追いかけても追いかけても

追い付けない。

救いがドンドン遠退いていく。

嫌だ

そんな

ウツ……………!?

何、頭が急に痛く……………!

そこに映ったのは、記憶。

血塗れの遺体の記憶。

焼き尽くされた記憶。

私を救ってくれたあの少女の記憶

そして、

私をいたぶった悪魔の記憶。

そうだ、思い出した。

私は

あの男から

逃げて

「よお、何処へ行くんだ？お嬢ちゃん」

急に肩を叩かれた

おそるおそる振り向くと

あの男がいた。

「酷いじゃないか、パパに断りも入れずに外出するなんて」

物凄い力で引き戻されそうになる

ああ

い、嫌

も、もう復讐するなんて言わない

だから

助けて

ワン！ワン！

犬の声が聞こえる。

すると、更なる力で引き戻された

手のひらに温かい感触が伝わる

足元を見るとあのリボンの女の子が私の手をしっかりと握り締めていた

体格差がかなりあるのに、この子はぐんぐんと私の手を引っ張る。

その強引な引きで私達は走った。

負けじと男も怪物へと姿を変え、追ってきている。

どれくらいの距離を走ったでしょうか。

時間の感覚が霞んでしまうほどに頭が朧気だ。

あの男は姿を消していた。

何処へ行ったのだろうか。

ひとまず、危機は去ったら幸いです。

お礼を言いたい

しかし、今の今まで手を握っていたはずの少女も

消えていた

そして、握られていたはずの掌には手足がちぎられてバラバラになった人形があり

それと同時に顔半分燃え盛るような痛みが走った気がしたが、私は無表情で頬を撫

でた

「ん？………なんだこの狛犬」

私は今、とある場所へと訪れていた。図書館から北上し、山の神社へと向かおうとしていた。理由としては………正直ない。本は読んだのだが、手掛かりとなるものは一切記載されていないかった。

載っていた情報としては、彼女の母親に当たる家系の記録だった。50年ほど前のことだろうか。近代化が進み土地が開拓され、国が大きな発展を遂げる頃。自然を守るためにとある巫女が燃焼する化け物を退治する物語。

蛙の姿をした怪物を封印し、山に聳える神社にて代々その使命を継いできた。そんなことは従姉である私は当然知っている。目新しい情報は何処にも残っていないのだ。

怪しいとすれば、封印された怪物がその子孫であるルキアを連れ去り、拷問しているという私の勝手な説だ。

だが確証はないし、第一連れ去った犯人はその封印された化け物とも限らない。

と長くなってしまったが宛がなくなり、この街の怪しい場所をくまなく搜索することにしたのだ。時間は掛かってしまうが、何も行動しないで待つよりかは幾らかマシであろう。

そんなこんなで私と新しい友『ハル』は現在、謎の狛犬の前に訪れたというわけだ。

「……………赤いね」

「……………そうだな」

それ以外に残す言葉がない。赤い狛犬の像。暫く眺めたり、何かないか探ってみたりしたが、特に目立った現象は起きない。なので私達は黙って立ち去ることにした。

時間を無駄にした気がした。私達は廃墟となった商店街を横切ろうとしているところである。この場所は比較的図書館に近い場所に位置している。故にあれからそんなにたいした距離を移動したわけではない。

しかし、どうせならば赤い狛犬を見つけたのだから青い狛犬もいるかもしれない。そんな幼稚な考えを巡らして、私は近道である一本道に足を進める。

すると、頭上から何か落ちてくる音が聞こえた。私は危険を察知し、ハルを抱え前転する。

「な、何……………!?!」

「気をつけろ! まだ来るぞ!」

とは言ったものの、なんだこいつは……………!? 顔の形をした異形が空から降ってきた  
だと……………!?

どういう経緯でそうなったのかは分からないが兎にも角にもまずはコイツを撒かないと話にならなそうだ。

私は足の遅いハルをそのまま抱えたまま、やむを得ず来た道を引き返した。進行方向に立ち塞がれてしまつてはこの一本道では逃げ場がない。

持久力には自信があるが、ハルを抱えたままではいずれ貧乏になってしまう。やはり何処かに身を潜める必要がある。

相手は不気味な笑みを浮かべながら、瞬時に移動し私に襲い掛かろうとしている。時々顔と色が反転し、猛スピードで迫ってくるなど相手も戦法を変えてくる。

「フン、そんなに私が好きか。全くモテる女とは辛いものだ」

「冗談言つてないで、早く逃げてよ！」

私は素早く近くにあつた小さめの鳥居へと駆け込んだ。流石にこんな得体の知れない怪物などこの神聖な場所へは立ち入れないと思つたからだ。

しかし、そう思つたのも束の間。怪物はそんな鳥居もお構い無しに突き進んできた。

「クソッ！やはり、効果は薄いか……………」

万事休すである。何か策はないか。そう思つて辺りを見渡して見るも抜け道らしきものもなく、この状況を打開するのは難しそうだ。

ここまでなのか？こんなところで終わってしまうのか？私はまだルキアに出会つてもいないのに。まだだ、まだ終われない。せめてもの抵抗だこれでも喰らえ！

「ウオオオオオッ!!」

私は足元に落ちていた岩を掴み、相手に殴り掛かった。これで死んでも私が最初に徘徊者に立ち向かった間抜けな者として、ハルはきつと語り継いでくれるだろう。そう信じている。

すると、眩い光が辺りを包み込んだ。私とハルは思わず腕で視界を覆ってしまった。敵を目の前に見失うのは非常に不味いのだが、やむを得ずそうしてしまった。

光が晴れると化け物の姿は消えていた。待つてくれ、状況が飲み込めない。何処にあの怪物は行ったのだろうか？

「あ、狛犬さんの口が……………」

ハルが指差した方向には先ほど見た狛犬とは違う、また別の狛犬が佇んでいた。よく見ると何かをたつた今喰らったかのように、口元がべつとりと血に濡れていた。

「まさか……………あの狛犬が？……………！」

私は何かを察した。あの顔の怪物はもしかして妖怪などの類いではないだろうか。それと日本で神聖な動物として知られる狛犬。だからこそ邪悪であるそれを喰らって私達を救ってくれたのではなからうか。

とにもかくにも、今のうちにここから早く去ろう。そう思つて私はハルの手を繋ぎ、急ぎ足で神社から駆け出した。狛犬が守ってくれたとはいえ、奴がまだ死んだとも限らない。

あの妖怪の感知範囲から逃げ切れば、ハルだけでも逃げ切れるかもしれない。

暫くしてあの路地へと戻ってきた。そして、私の期待は見事に裏切られた。何事もなかったように妖怪が再度上から降ってきた。

ズシンと着地した辺りが揺れる。ハルを抱え、再び同じ道に戻ろうとしたその時、

「ウツ!?!」

突如、足が言うことを聞かなくなり私は地面に崩れた。

「クレイお姉さんッ!?!」

どうやら気付かぬ内に足の体力がとうに限界を超えていたらしい。それもそのはず。何しろこの短時間でどれだけ長い距離を歩き、走ったのは始めてなのだ。逆によくここまで休みなしでもったと感心したいぐらいだ。

そんな私に気がついて、此方に振り向くハル。彼女には生き残ってほしい。従妹も救えていないのに、他人の命を道連れにするなど、きつとルキアが怒るだろう。彼女は自分を犠牲にしてまで、他人を思いやる優しい子だったから。こんなことで命を無駄にすれば、きつと笑われてしまう。

「い、行け！ハル！私はいい！お前だけでも逃げろ！」

「で、でもそんなことしたらクレイ《・・・》が！」

「私のことを心配してる場合か!? お前は別れた《…》友の分まで生きねばいけないの  
だろう!? だったら生きてくれ! 私の分まで!」

汗が額を伝い、意識が朦朧としてしてきた。そんな中、ハルは急いでここから立ち  
去っていくのがかろうじて確認できた。目元が涙に濡れているのが見えた。涙がポタ  
ポタと地面に落ちていくのも。

私は死を覚悟した。こんなにも死が怖いと感じたことはなかった。父様と母様ごめ  
んなさい……。そして、目を瞑った。

しかし、予想外の事態が起きた。妖怪は私に目も暮れずハルを真っ直ぐ追いかけて  
行った。なんてことだ、てつきり人を無差別に襲う知能が低い妖怪だと勝手に思い込ん  
でいた。

追い掛けようにも、足が全く言うことを聞いてくれない。これは誤算だった。狙いは  
最初から私ではなくて、ハルだったとは。

「動け、動いてくれ……………！私の足！」

その願いも届かず、私はただただ妖怪がハルを猛スピードで追い掛けて行くのを呆然と見ていることしか出来なかった。

そして、駄目なのかと思いい始めた直後に肉がミートハンマーで潰されたときの生々しい音が聞こえてきた。

まさか、そんな

「ハルツッ!!!」

私は友の名を大声で呼んだ。死んだなんて認めたくなかったから。すると、ヘロヘロになった血塗れの生命体が前から歩いてくるのが見えた。私はそれが誰だか即座に分かった。

「うえええ……………」

「ハル！」

私は妖怪の肉まみれで涙ぐんでいたハルを思い切り抱き締めた。自分も血塗れになったが、そんなことはどうでも良かった。兎に角、生きていた。それだけが何よりだった。

「おい、ハル。あの怪物は………？」

「あのね、私あの赤い狛犬の所に行ったんだ。そしたら、あの怪物が青い狛犬のときと同じように食べられちゃって………」

ならば、あのオッサンみたいな顔をした化け物は死んだのか………。あの妖怪はルキアと何も関わりがなかったと祈りたいのだが。

「なあ、ハル。そしたら、さっきの神社へ戻って見ないか？何かあるかもしれないからな。」

「ただ気になるだけでしょ。」

「うるさい、私が行くといったら行くのだ！」

半強制でハルとチャコを神社に連れていくと近くの祭壇にミニサイズの狛犬の置物が置かれていた。先程きた時には祭壇には何も置かれていなかった。

心なしか本物より可愛いデザインになっている気がする。気のせいかもしれないが。

私はこれらを『狛犬セット』と名付けた。

「名付けのセンスないよ。クレイお姉さん。」

ハルに心を読まれた気がした。腑に落ちん。

引き続き、死ぬような思いをしたが私達は家に置物を戻し、探索へと乗り出した。

「さて、次は何処に行こうか？……………ハル？」

ハルに尋ねても返事がない。イラツとしたので目を向けると彼女は呆然と門の前を見つめていた。チャコもそちらに向かって吠え始めた。理由を知るために私も門の方へ目線を戻した。

すると、門に人影が見えた。灰色の髪に虚ろの瞳。私以上の身長を持つ人影。どうやら女のようなだ。そしてその人物に私は見覚えがあった。

「……………お久しぶりですね。元気にしてましたか？」

## 第九章 虚ろ

ある山に白い髪をした巫女様がいました。

とても優しく慈悲深いお一人でそんな彼女は村のある男に恋をし、一人の娘が生まれました。代々、自然を守つてきた後の巫女になるための大事な跡取りです。

その方の母親はいいました。

「この子や他の人々のために山の自然を犯さないでほしい。その事をこの子に教えてあげてほしいのです」

村人はこの言葉を掟として語り継いできました。そしてその巫女の娘も掟に従い、時折村に降りては子供達と遊んでいました。

そんなとき一匹の蛇が娘の前に現れました。この島では見たことがなかった種です。

そしてその蛇は娘の側に近寄ってきてこう言いました。

「私達とお友達になつて」

「お久しぶりですね。元気にしてましたか？」

不気味な微笑みで此方に語り掛けてくる灰色の髪をした女。その人は今までずっと探し求めていた人物だった。

「ほ、本当にお前なのか……………？」

私知っている彼女はもつとクールだった。常に冷静で隙は見せない。けれど何処か可愛げもあって私といった時は少なくとも複雑な表情は浮かべなかつた。それは笑いという表情をも含めて、だが。そのせいかな今は彼女が全くの別人に見える。

そして彼女は今、笑っている。不気味なまでに微笑み続けている。その表情は上部だけ。彼女の瞳に宿る虚ろがそれを教えてくれる。それに彼女の顔に大きな火傷の痕が出来ている。少なくとも私が一緒にいたときはこんなものはなかつた。

私の思い過ごしかもしれないが、ルキアは何かに取りつかれてでもいるのか……？

「ク、クレイお姉さん……！もしかして……!？」

「ええ、ハルさん。私がその者が探し求めていたルキアです」

彼女は私を指差しながらそう言った。

しかし探している人物がいきなり出てくるなんて不自然じゃないのか？しかも、ハルの家から出て3分ほどの場所だなんて。あまりにも都合が良すぎて疑惑の念がますます私の中で膨れ上がる。

「でもなんで、わたしの名前を………？」

ハルがルキアに対して率直に質問した。そういえばそうだ。何故、彼女はハルの名を知っているのだ？ルキアとハルは会うのは今日始めてのはず。知り合いから教えられでもない限り、知っているわけがない。

「ああ、そうでした。何故、私が貴方の名を知っているか教えていませんでしたね。聞いたのですよ、隣街の友人に」

友達………？我々の家族は越してきたのはつい最近だ。あまり口に出したくはないが、ルキアは人間関係を作るのが苦手なヤツだった。故に友達など作るのには彼女一人では少々荷が重はずだ。ならば強引にも彼女を止めねばならないのか………

はっ！お、落ち着け私。その判断は冷静でない証拠。よくよく考えてみればここに来てからもう2年近く経過しているではないか。

ともかくにも、まずはルキアが操られているのか確認せねばなるまい。ここはいつも通りの対応で行こう。そうすればボロが出るかもしれない。

私はルキアに近付き、向かい合った。数秒ほど沈黙が続いた後、私は口を開いて彼女に話しかけた。

「ふっ、お前が友達だと？人付き合いが苦手なお前がよく作れたものだな」

「いつまでも子供扱いは止めてほしいですね。フフツ、しかし……………随分見ない内に貴方も変わりましたね、姉さん」

「ほう、私の何処が変わったというのだ？言ってみろルキア」

「なんで罵り合いになってるの……………？」

ハルが心配そうな顔でおどおどしている。しかし、私は彼女から何か聞き出すまで尋問を止めない。

「その少女のお友達ですよ、姉さん。……………しかし、私が言うのも難ですが人付き合いが苦手なのは貴方も同じなのではなかったのですか？」

「そうなの？クレイお姉さん？」

「ま、まあ人付き合いが好きかと聞かれればそうでもないが……………。って違う違う！こんなことを話している場合じゃない！いいか、単刀直入に言うぞルキア！お前は数日前に叔父さんを殺して行方不明と聞いた！何故だ！何があつたのだ!？」

「……………別に。……………どうもしませんよ。ただあの男に腹が立った。それだけのこと」

微笑みを浮かべていた彼女の表情が崩れ、先程までの余裕が少しなくなつたように見えた。

「ならば、一度家に帰ろう！私の家族もお前が殺人を犯したなんて何かの間違いだと信じている！何か危険なことがあるなら言え！私達が何とかしてやる！だから………」

「なら私は!!尚更、貴方の処に帰ることは出来ません!!!」

彼女は柄にもなく大声で私の問いかけに反論した。こんなにも取り乱しているルキアを見たのは始めてだった。私が側にいない間、何があつたのか。手の届きそうな距離にいて今にも救えるというのに、とてつもなく遠い場所に行ってしまう。そんな気がしてならない。

彼女は私に背を向けた。私とハルに情けない姿を見せまいとしているのだろうが、体が小刻みに震えていて何かに怯えている様子がまる分かりだ。そんなとき、ルキアはふと何かを思い出したかのようにハルの元に向き直り、近づいた。

ルキアは私よりも高い身長を持つためまだ幼いハルからしたら彼女はまるで巨人だ。

すっっかり怯えきっているハルの前で彼女はしゃがみ込み話しかけた。

「……………ハルさん。多分、貴方もご存知の人でしょうが、隣街に私の友達がいるのです。是非、私にあつたと伝えてほしいのです。こんな夜更けですが、お願い出来ないでしょうか」

ハルは無言でコクツと頷いた。すると、無表情だった彼女は少しだけ微笑みを取り戻した。それはかつて私にも向けてくれた表情だ。彼女が安心した時に浮かべる表情。

「そういうことですので、もう姉さんは私を探さなくて良いということですよ。では、さようなら」

「ちよつと待て！まだ私はお前に何があつたのか知らない！せめて敵の名だけでも教えてくださいでもいいだろ！」

「……………あのおとぎ話を知っているならば、分かるはずですよ……………」

そう言って彼女は目の前で姿を消した。どんな手を使ったのかは不明。おとぎ話………。何のことかさっぱり分からない。完全に足取りが失くなってしまった。これで終わり………？

いや、これからだろう。

私は内に秘めた決意が沸き上がってくるのを感じた。確かに今、ルキアを見失ってしまった。残していった言葉の意味も謎だ。

しかし、救わなくていいと言われれば尚更救いたくなる。挑まなくていいと言われると尚更挑みたくなる。往生際の悪さ、異様なまでな好奇心。それが私の個性だ。

前にも言ったが久しぶりなのだ。こんなにもスリルがあつて刺激が感じられる日を迎えるのは。もう、私は自分を攻めない。私は私。大事な人であるルキアを取り戻す。

「ねえ、おとぎ話ってさつきクレイお姉さんが読んでた本？」

「おそらくそのことだろうな……。……。それにしてもハル。お前、隣街にも友がいたのか？」

「うん、数日前に出来たばかりだけどね」

「ふむ……。なるほど。……。すまない、ハル。一つ頼みがあるのだが……。……。」

---

先程、姉に会った。いえ、会いに行つたという方が正しいでしょうか。ふと思ひ出したかのように自然と彼女のいる方向に足を運んでいた。

助けを求めに行つたはずなのに何も言えなかった。長年顔を合わせていなかったからだろうか。いや、そんな単純な理由じゃないでしょう。

私は頭を抱え、夜の街を彷徨う。記憶に霧がかかっているようでよく思い出せない。

徘徊者達は見向きもしなくなった。寧ろ怯えて私を避けているようにも見える。

しかし思い出せない。何でしたっけ……………私は何のために彼女の元へ行つたのか……………

彼女……………彼女？

あの人、なんて名前だったでしょうか……………。頭を掻きむしっても記憶は取り戻す処か失われていく。一つ、また一つと。

そしてまた、顔に刻まれた火傷の傷が疼いた。私はそつと手を頬に添えた。

「えっ、今からとなりまちに行くの!？」

ハルは驚いた表情で私を見詰めていた。確かにハルの言うことには一理ある。もうすぐ日付が変わる時間帯になるし、私一人で行けよ、という発想になる。

しかし、私は何分越してきてまともはこの町を歩いたことがなかったから道のりが分からない。……………何度も言ったかもしれないが。

「そうだ、ハル。ここまで来てお前はあの子を放っておけるのか？」

「……………それはそうだけど……………。でもあの人何か怖かったし……………」

「徘徊者に比べれば幾らかマシだろう」

「……………」

「よし決まりだな、さあ！案内してくれ！」

「まだ何も言っていないよ！」

ハルとは裏腹にチャコは今にも出掛けたさそうに尾を振って指示を待っている。私はしゃがんでハルとチャコの頭を優しく撫でた。

「お前達は私の盟友だ。お化けからは私が守る。だから頼むぞ」

「もう……………ずるいよお」

照れくさそうにしても、ハルはちゃんと私の言うことを聞いて次なる目的のために足を動かした。なんだかんだ言ってもとても良い子だ。それに意気揚々と夜の街を歩くポメラニアンのチャコ。

この犬も小さいながら勇敢なヤツだ。この殺伐とした世界でしつかりと私達を守ってくれる。この冒険が終わったら、ハルの引越しを手伝おう。そして、送り出してやりたい。何時までも元気に盟友としていられるように。

ハルの首元に下げている懐中電灯の弱々しい光が先の見えない闇夜を映し出す。そんな中、出立してからまだ時が立つ前にとある出来事が発生した。

アア……………アア……………

嘎れたうめき声を出す白い徘徊者。道中に幾度と見てきたが、何やら様子がおかしい。いつもならば生者に対する恨みを込めて、一直線に襲い掛かってくる。

が、今回は私達に見向きもせず目の前を通りすぎていった。怨霊が逃げ出すなどよつぽどのことだ。どれだけの怪異が迫っているのかと内心肝冷やしたが、振り返って

も何もいない。電灯の灯りがうつすらと暗闇に見えるだけだ。

ワン！ワン！

「どうしたのチャコ……………!?」

チャコが何かを察知して前方に威嚇を始めた。犬が危険だと警告する時はどうにも嫌な予感しかしない。しかし、徘徊者は私達を無視していた。となると徘徊者ではない別の驚異と考えられる。

徘徊者以外の驚異となると身構えた処で太刀打ちできないだろう。慎重に行動することを心掛けながら、進んでいるとそれは現れた。

いや、それらか。奴らは2体同時に現れた。

「ハル！後ろだ！」

「えっ、」

「ぐっ……………」

突然、真つ赤に錆び付いた刀身をした裁ち鋏がハルを狙っていたため、私は滑り込んで間一髪、ハルを救出した。

「あ、ありがとう……………！でも……………なんでコトワリ様が……………？」

「私を知るか！元々、ああいう性格じゃないのか!？」

「で、でも神様だよ！理由もないのに襲ってくるなんて……………。……………！」

「な、なんだ……………？あの巨大な蜥蜴は……………？」

コトワリ様とは反対方向から普通の倍以上の大ききをした蜥蜴が接近していた。焰のように燃え盛るその身体を燻りながらゆっくりと。

## 第十章 縁の神様と怒りの化身

その蛇は双子の姉妹の片割れでした。

後から連れてきたもう一人の姉妹も友達になりたいと言いました。巫女の娘は同年に女の子の友達が少なかったので、とても喜びました。

けれど村の人はそんな巫女の娘を不気味に思い、子どもたちを娘から引き離しました。

娘は酷く悲しみました。これはおかしいと思った巫女が山から降りて、村人に納得してもらえよう訴えました。

「私と娘は生まれつき備わった力があるのです。どうか信じて下さい」

しかし彼らの心境には届かず、巫女は無力な自分を恥じました。

寂しそうな彼女たちを想い、蛇は娘のもとを去りました。

しかしもう一匹の蛇は娘とその家族を守るために密かに残り、何世代も見守り続けました。

さて、私は今どんな状況に立たされているか分かるだろうか。

答えは単純明快、絶望しかない状況だ。

何せ、前に肉裁ち鋏の神様と背後には燃える魔獣が控えている。しかも、逃げ場のない一本道で。

チャキチャキと鋏を鳴らしながら唸るコトワリ様。コイツらに関しては本当に得体が知れない。

特に燃える魔獣は此処等で噂にすらなっていないのが不気味でしょうがない。

こんな派手な見た目をしておきながら、目撃情報処か有名な言い伝えすらないとなると、対処法がない。

正に万事休すと言ったところか。

「ハル、お前はコトワリ様の元を何とか掻い潜って安全な所へ逃げろ」

「え……………でもクレイおねえさんは!？」

「それに関して頼みがある。紙飛行機と小石を貸してくれ。それで何とか奴らの気を反らす。その間に逃げてくれ」

「で、でも……………」

「いいから行け!何、私のことは心配するな。直ぐに追い付く!」

私はハルから紙飛行機と小石を借り、直ぐさま後ろの魔獣に投げつけた。コトワリ様

には全く効果ない。

まあ当然の結果であろう。どのみち期待はしていなかった。

しかし、後ろの蜥蜴には効果抜群だった。紙飛行機を投げつけたのだが、高く舞い上がってヒラヒラと漂っていくそれを親の仇のように激怒し、追いかけていったのだ。

これは嬉しい誤算だ。正直、此方にも期待出来なかつたため、良い展開が生まれた。

「さあ！走れ！」

「う、うん！」

チャコを連れてハルは蜥蜴の懐に入り込み、先に逃走することに成功した。私が最初に会ったときより、動きが機敏になったように見えた。凄いな。幼いと適応力が凄まじい。

おっと、感心している状況ではないな。

私もハルに続き、隙が生じた間に駆け抜けようとする。しかし、現実はその上手くない。

コトワリ様がワープによる瞬間移動で私の前に立ち塞がった。我々を逃がすまいとコトワリ様は斬りかかってくる。

「ふっ！」

間一髪、転がり込むことで攻撃を回避した。だがそう何度も続くものでもない。体力というものが存在する限り、いつかは殺されてしまう。

コトワリ様は懲りずに私に攻撃を続けようと再び鋏を大きく開いて、助走をつける。

(今だッ！)

一瞬の隙を付き、私はコトワリ様とすれ違うように横をすり抜けた。そして、そのまま助走を付けて走り出す。ヤツは瞬間移動を駆使して、私の前に回り込もうとするだろう。

そこを突いて、なんとか撒いていきたいものだ。

曲がり角が見えてくる。どちらに進むか。ここは本能に従って右にしよう。

今度はは曲がり道か。ジグザグに動きながら上手く突破。また曲がり角。今度は左。

ヤツが追い掛けてくる気配はない。どうやら無事に撒けたようだ。

「ふう、なんとか撒いたか……。しかし困ったな、またハルとはぐれてしまった  
……………」

見渡してみると、見覚えがある道に立っていた。ここは私がいつも学校からの帰りに使っている帰路だ。

いつの間にかこんな所にまで戻ってきてしまった。無意識に馴染みのある方へと向かってしまっていたらしい。

全く、うちの従妹はどうしてこうも私に迷惑をかけてしまうのか……………。

あの蜥蜴の化け物は、おそらく彼女と繋がりと見て間違いないだろう。仕掛けてきたのも策略の一つと見て取れる。

……もう片方の神は何を考えているのか予想もつかないがきつと何かしらの執着があつてのことだろう。

一度は廃れてしまった神社の主だ。到底、生まれ変わったなどと甘い発想を抱くべきではない。

奴は使命をまっとうする気力も残っていないのだろう。

すると、ゾクツとする冷たい感覚が全身に走る。誰かに見られている気がする。目線の先からして近くにいる。だが不思議なことに徘徊者や厄介な2体のような殺気は感じられない。

すると近くの住宅にある茂みから、ガサガサ、と草根をかき分ける音が耳に飛び込んできた。

「何者だ！ 正体を表せ！」

確かにソイツは出てきた。しかし、私が予想していたより大幅に姿が異なっていた。

「なっ、お前は、……………!!!?」

私は一瞬の隙に袋のようなものに捕らわれ、そして、意識を失った。

ガン……………ゴン……………

聞き覚えのない金属音が辺りに響き渡る。

点滅を繰り返す電灯に錆びた鉄壁。

どこだ、ここは……………。

「はっ！ハル！」

そう言つて私は飛び起きた。周りを見渡すと辺り一面苔が生えて変色鉄壁に覆われていた。見覚えがない場所だ。乱雑に寝かせられていたためか、制服が汚れてしまつていた。

全く汚いな。折角の制服が台無しだ。

でもそんなことは今はどうでもよい。あの軟体動物のような生き物は何だったのだろうか。いきなり私をさらい、こんな辺鄙な場所に閉じ込めるとは。

もしかして変態の類いだったのでと疑いの念が晴れないが、私は考えるのを一旦止め、兎に角ここから早くでないことには仕方がないと思つた。速く、でも慎重に動くことを心掛け、謎の建築物内を進んでいく。

図書館のときと同じく、夜の町とはより不気味な雰囲気漂わせている。チカチカと点滅する電灯がそれをさらに増幅させている。

だが不思議と怖さを感じることはない。寧ろ、どこか悲しげになる気持ちにすら思えるのだ。正に黄昏の建物の名にふさわしい。

しばらく進むと壁際に生えていた草むらから、あの軟体動物のようなそれが飛び出てきた。黒く虚ろであり、仮面のような眼でこちらを見詰めてくる。

そして、それは突然

裏返った。

「いつ?」

表現するのが難しいが兎に角、袋のような部位が裏返り、肉の塊に変貌したのだ。ふざけているのかと一瞬は思った。

しかしそうでもないらしく、仮面を包み込んでいる部分は巨大な口へと変わっていた。そこには私の顔ほどの大きさをした歯がびっしりと並んでいる

凄まじい殺気だ。さっきの温厚だった形態とはまるで違う。

私を喰らおうと、ソイツは歯をガチガチ鳴らしながら突進してきた。このままでは喰われる。こちらもただでは死んでやれない。

私も対抗すべく、全力疾走で走り出した。自慢じゃないが、これまで幾度の危機を乗り越えてきたのだ。簡単に距離を離せるかと思っていたが、意外にもヤツの追ってくるスピードは速い。

何か策はないものか。石ころなんかぶつけたところで焼け石に水だろう。ならば何がある？ハルからもらった紙飛行機か？いかんいかん、それこそ資源の無駄遣いであろう。

一本道を辿っていると、巨大な煙突と金属性の階段が見えてきた。

しめた、あれを登れば多少は時間を稼げるかもしれない。錆び付いていて機能するかは不明だが、希望はまだある。

私のがむしやらに走り、階段を滑るように駆け上がった。階段は耐久力がないどころか、うんともすんともいわない。鉄とは実に偉大だ。

ガンツ!!

後方から金属に物体がぶつかると騒音が鳴り響いた。振り返ると怪物がすぐそこまできていた。遅れていたら死んでいた。そう考えるとゾツとする。

怪物は階段の隙間に自身の肉がつかえて登りづらそうだ。乗り越えてくればいいものを何故そうも強行手段で乗りきろうとするのか。やはり、知能はそこまで高くないらしい。

とはいえ、引つ掛かって動けなくなっているのも事実。私は急ぎ足でその場を後にした。

先に進むにつれてベルトコンベアや煙突、それに何かを生産していた名残がある機械

を見掛けた。どうやらここは工場らしい。工場………そんな場所あの町にあっただろうか？

自分が思っているより、遠くに連れ去られてしまったかもしれない。せめて住んでいる町の近くだと願うしかない。他県だったら詰みだ。野垂れ死ぬか徒歩で帰らなければならぬ。

………そんな死に方は御免被る。私にはまだ使命が残っているというのに、こんな所で朽ちてなるものか。大事な弟や従妹もいる。

私は皆と共に暮らせる日まで諦めはしないのだ。

宛もなくさ迷い続けること数分。一向に出口が見えてくる気配はない。道中、様々な徘徊者に襲われた。

赤ん坊の霊魂、海胆にも見える毛むくじやらの異形。転がってきたタイヤに火の玉を乗せて、火車の完成。顔をひっくり返しにして無理矢理胴体に取り付けたような巨人など種類は滅茶苦茶。

あのグロテスクな仮面にも襲撃を受けた。何せ上から降ってきて、廃車を潰しながら襲い掛かってきたからな。

あのときは盛大な音に私も驚かさされたものだ。当然、逃げ回るだけの風景だったため、何も語ることはないがな。

そんな中、見渡す限りかなりの広さがある広場へと出た。何もいないと確信するにはまだ早い。

ヤツらは暗闇に潜んでいる。近くにある電柱を頼りに目を凝らすと、先程の海胆やタコのような触手が生えている巨人が壁の如く立ち塞がっている。

このような巨大な徘徊者は、石を投げて動きを釣るなどの小細工は通用しない。なんとか自力で突破し、奥に見える坂道を進みたい。

暫く彼らの行動を観察してみることにした。すると、巨人の方はじつと同じ場所に留まっているわけではなく一定の距離を行ったり来たりしている。

幸い此方を見詰めても追い掛けてくる様子は伺えないので、なんとか海胆と巨人の合間を縫って私は修羅場を突破した。

鉄板の坂道を登っていくと、何やら人影が見える。徘徊者にしては殺気が毛ほども感じられないし、何よりハルに似た雰囲気を漂わせていた。

不思議と私は警戒することなく、その人影に声を掛けてしまった。

理由は分からない。多分、私が持ついつもの癖だろう。恐怖や緊張感をかき消しても沸き上がる好奇心に抗えないのだ、私は。

「おい、お前。そこで何をしている？」

すると人影は、はっとした様子で此方に振り返った。

振り向いたその姿は少女だった。年はハルと同じくらいだろうか。ウサギのポシエットに左目には怪我をしているのか眼球をすっぽり覆い隠すほどの大きい眼帯がつけられている。

ハルと同じ雰囲気、とはいったがハルほどの恐怖感は感じられない。同じくらいの年のはずなのに彼女よりも大人びている。

もう少女が一人で出歩いている光景を目にしても、何も感じなくなってしまった私は

既に感覚が可笑しくなっているのだろうか。

そして、目の前の少女は冷静な声でこちらに返事をしてくれた。

「こんばんは。こんな場所で人に会うなんて珍しいね。

あ、もしかしてお姉ちゃんも『よまわりさん』にさらわれてきちやった？」

「『よまわりさん』だと？」

聞いたことがある。確か隣町に住む怪物の名前だ。夜な夜な徘徊する子どもを拐つて何処かに閉じ込めるといふ。

となるとここは隣町なのか。だが『よまわりさん』という名は都市伝説並みに曖昧な話だったはずだ。本当にヤツがそうなのだろうか。

「——私を連れてきたヤツがそいつかどうかは知らないが、私は人を探してここまできた」

「ふうん、そうなんだ。わたしはちよつと眠れなかったからお散歩にきただけ。それで探している人はどんな人？お友達？大事な人？」

何気ない目で見詰めながら、質問をしてきたので私は率直に答えた。

ついでにルキアのこととも知らないか尋ねてみよう。この辺りに詳しそうだから、見掛けたなら答えてくれるはずだ。

「探しているのは従妹だ。灰色の髪の毛を宿した私と同じくらいの年の女の子だ。どうだろうか？君は見覚えはないか？」

「——っ！……わたし知ってるよ、その人」

「本当か?! ——今何処に!？」

「といつても最後に会ったのはもう2年ぐらい前だよ。」

「だから今どこにいて、何をしてるかはちよつと分からない」

「そ———そうか。分かった、手間を取らせてすまなかつたな」

済ました顔をしてこの場を離れようとした瞬間後ろの少女に手を捕まれて引き止められた。

少し力をいれても離してくれる気配はない。何か言いたいことでも残っていたというのか。

「———あの蜥蜴みたいなお化け」

「ん?」

「あの黒焦げになった蜥蜴みたいなお化けがお姉ちゃんを拐っていったの」

「何故、今私にそれを?」

「———貴方ならお姉ちゃんを助けられるような気がしたから」

ガーゼをした左目を押えながら、悲しそうだが少し希望に満ちたような声色で私に期待していることを伝えられた。

「……………なるほど理解した。

それで提案なんだが——どうだ、お前も共に行かないか？ 従妹の数少ない知り合いなんだ。それだけでもアイツは喜ぶだろう」

「——わたしはいけない」

と即答で断られた。やはり少々、強引すぎたか。同行してもらうことは諦めるしかなさそうだ。

「毎日ね、夜になるとお化けがおうちの中でも見えるの。

またお姉ちゃんがさらわれちゃうかもしれない。だから、わたしは夜を歩き続けるの」

「……………家族思いだな。お姉ちゃんルキアのことはこの私に任せろ。

君は自分が最善だと思つたことを続けるべきだ」

「ありがとう。じゃあね、お姉さん。

またどこかで」

「さくらばだ」

私は少女に背を向けて歩きだした。少し、少しだが希望が見えた気がする。

この問題は私達家族のものだ。本来、他人である彼女達に頼るわけにもいかないのだらう。

だが私は頼りない女だ。助けてもらわねば、生きていけない。それが人間というもの。

死者である彼らにもこの思いが届けばいいと叶わぬ願いを密かに抱いた。

帰り際に隠された小さな隙間を見つけた。そこには一輪の花が添えられており、私は好奇心に負け、反射的にその花を手にとってしまった。

激怒したよまわりさんに追い回され続けていたら、いつの間にか正門と思われる大きなゲートが出現した。

奇跡的にその門は開いていたので、なんとか脱出に成功した。

よまわりさんはもう追ってはこなかった。同情まではしなかったが、この大切そうに添えられていた桃色の花を持ってきてしまったことを私は申し訳なく感じていた。

一瞬だけだったが、例の燃える怪物（観）が見えた気がした。奴は相変わらずこちらを挑発するような態度をとっていたが意図がどうしても読めなかった。

私に何を求めているのか。今の時点では分からないが、ヤツがルキアを連れ去ったことは確定した。

この夜道に終止符を討つのだ。夜明は必ず訪れる。

飛ばされた場所が偶然にも隣町だということが分かったので、シャッター通りに残っていた地図を確認しながら町へ帰る帰路を辿っていった。

かなり迷ってしまっただがな。

帰路の途中に百足の紋章が描かれた神社を見掛けた。これも何かの縁だろう。そう  
思い私は持つていた十円をお賽銭箱に入れ、祈りを捧げた。  
普段ならば、こんなことはしないのだがどうしたというのか。

神社の鳥居付近までハルが迎えにきており、私は無事に隣町から出ることが出来た。  
そこまで遠い場所でなくてよかったと心から思った。

そして、町へついた直後に気がついた。いつの間にか私は塩を握り締めていた。  
塩というのは悪霊を追い払う言い伝えがあると聞く。活躍の場があるといいのだが。

## 第十一章 廃屋

ある日のこと

天からいきなり光が降ってきました

戦火によつて生まれた海外の

巨大な鉄に覆われた鳥が落としたものでした

その光は全てを焼きつくし

大地を灰へと変えました

巫女の村は跡形もなく消え去り

母親と蛇の片割れも死んでしまいました

娘の美しき白の髪は灰褐色に染まり

もう一匹、同じ炎に焼かれた鯢カワスの化け物と出会いました

私、いや。私達は町中を一旦離れ、廃屋の近くにきていた。私にとっては関係もないし、大した用事ではない。

用があるのはハルのほうだった。彼女はかつてこの場所に訪れたことがあるというのだ。

話を聴くと彼女の友である『ユイ』がここにいるという直感だけで乗り込んだ廃屋だと。

直感だけで今にも崩れそうな場所へ足を踏み入れるなど気がしれていると数秒ほど考えてしまったが、私も人のことを言える立場ではないことを思い出した。

私も相当な無茶を繰り返し、ここにいることを忘れてはならない。それにそんなことは今更すぎる。

とうに私は踏み入れるべきでない領域まで片足を突っ込んでいる。いや、片足どころか下半身が浸かっているか。

それはさておき、何故ハルがこの廃屋に再び訪れたのか。本人も理由は分からないとのこと。

けれどここはかつて火災の事故が起こり、屋敷の住人含め、全焼してしまったようである。ハルはその焼けた住人がどうしているか気になるのだという。

既に侵入した痕跡が残っており、屋敷自体にはあつさりと思ひ込むことができた。

しかし、全焼したという割には家具や木材の壁などまだしつかりと形を残していた。

普通は全焼などすれば幾ら丈夫な構造とはいえ、粗方炭になっているはずだ。触れてみても炭になって崩れるどころか、逆に湿っている。

ギシギシと嫌な音を刻む床を歩きながら少し進むと、リビングなのかよく分からないが妙に開けた広間に出た。その中央には極太の大黒柱がこの屋敷全体を支えている。

しかし、いかんせん建物の中は普段より暗いため、柱より奥のほうが全く視認できない。

唯一確認出来たのは、階段のようなものが上へ向けて続いていることだった。

巨大な蠅の姿をしたヤツや赤ん坊の霊などに留まり続けられ、いつ命を奪われるか分からない。

「長居は無用だな、さっさとすませようハル」

「うん、そうだね………つてクレイさん危ない！」

「ん？、つてうわっ!!？」

後ろに首を向けて歩いてきたため、目の前にあつた大穴に気付かずに私は進んでいたらしい。転落寸前だった。

ハルの忠告がなければ今頃、穴のなかで死んでいたかもしれない。

「す、すまん、助かった！」

「ううん、良かった。クレイさんが穴のなかに落っこちなくて」

「はは……………恥ずかしいな……………何をやっているのだ私は……………」

穴から二歩ほど後退りし、私は大きいため息をついた。

私がおつちよこちよいな性格でハルに迷惑をかけているな、と思っていたのだがそれ以上にハルは、私の姿を見て暗闇の怖さなど忘れ、とても嬉そうな表情を浮かべていた。

だがそんな彼女の背後に無音で黒焦げの靈魂が忍び寄っているのを察知した。

ハルは気がついていない。チャコを外に置いてきたのは失策だったか。

考えるよりも先に身体が動いており、手を取りハルと一目散にその場を離れた。

ハルは察しがついていたのか、突然の行動をした私に何の疑問も抱かずに黙って私に  
ついてきた。

奥の階段へ逃げるしか道はない。しかし床には穴が開いており暗闇が私達を招いて  
いる。少し助走をつけ、大きく幅跳びをするとギリギリだったが越えることができた。

ハルもしつかりいる。焦げた霊は諦めたのか姿が見えなかった。

（この屋敷の住人だったヤツなのか……………？）

何にせよ、徘徊者であることは間違い無い。逃げるしかなかった……………ん？）

安心するのはまだ早い。今度は屋敷全体が揺れ始め、瓦礫が頭上から降ってくる。幸い直撃は避けられたが、上に行く道は閉ざされてしまった。

「クソツ!!大丈夫か、ハル!？」

「う、うん、なんとか大丈夫だよ」

「しかし困ったな……………道が塞がれてしまったぞ……………お前の行きたい先はこの上だろうか？」

「……………ううん、もう大丈夫。用があるのはあの柱さん」

広場中央にある大黒柱を指して、ハルはそう言った。先程まで何ともなかった柱が木目から目玉を震わし、異形の存在へと変貌している。

ハルが懐中電灯の光を消し、恐る恐る近づいている。

「なんだあれは………!? つておい！ハル！そいつには近づくな！危ないぞー！」

ハルは大丈夫、と言わんばかりに私に止まってと無言で合図を送り、近づくの止めなかつた。

もはや手が届きそうな位置にハルが立つと柱は自身を震わせるのを止め、ただの柱に戻った。

小走りで私の元へ戻ってくると私に何かを渡してきた。

それは木目が刻まれた古びた木材と一枚の紙切れだった。まだ新しい。黒いボールペンで何か書かれているようだ。

木材のほうはハルに渡し、紙切れを受け取った。

「おぼけがくれたみたい、何か書いてあるよ?」

燃える怪物は山の奥に根城を築いている

ヤツは塩に弱い

逃げるための時間稼ぎにはなるだろう

即席で書いたためか紙の文字は汚くみすぼらしかったが、そう書かれていた。

これは重要な手掛かりだ。この持ち主は被害者への警告として記したようだが、私はこれを利用してヤツと蹴りをつける。

あの子達やハルのためにも、ヤツは絶対に止めねばならん。

「クレイさん」

「なんだ？」

私の名を呼ぶとハルは近寄って、私の手を取り

「絶対にいなくならないでね」

と言った。その言葉に重みを感じた私はハルを安心させるために、こんな言葉を返した。

「当たり前だ。少なくとも私は友を見捨てはしない」

それだけ残した後、私は少し気恥ずかしくなったが今回ばかりは後悔しなかった。ハルも何も言わず、私達は廃屋を脱した。

彼女の腕に握り締められている奇妙な木材は不思議と動き出しそうな気配を醸し出していたが、私は気にしなかった。

ハルはハル。私は私、クレイ。各々好きな過ごし方をすればいい。これも彼女にとって一つの思い出だ。嫌な記憶を植え付けてしまうかもしれない。

だが耐えてほしい。この世の中には苦もあれば極楽もある。朝があるように夜もある。たとえ、私に何が起きたとしても乗り越えてほしい。それだけが私の願いだ。

心の奥底で謝罪と助言を呟くと私は彼女を連れて、山のほうに歩きだした。

この町で最も不気味な雰囲気を漂わせているのはきつとあそこだろう。となれば目的のヤツが根城を築いているとすればそこだ。

待ってるルキア。今、姉さんが助けにいくからな。

## 第十二章 山奥へ

気が付くと私は山の頂上付近にポツリと立っていた。周りには誰もいない。しかし声だけは聞こえてくる。

すすんでください

ただそれだけだった。見上げるとそこには小さな木箱に輪の形状をした丈夫な縄。輪は顔が綺麗に収まる大きさで、本当に人一人くらいならば簡単につれてしまいそうだ。

吊れば簡単に楽になれるのだろうか。

諦めたい、家族を救うなど。今まで私は何をやっていったのだ。

罪悪感に苛まれ、己の身を削りながらも家族のために尽くす。

自分のことなど微塵も考える余裕すらなかった。私は一歩ずつ木箱に向かって足を進める。ハルもチャコも、あの女の子も。そして……………

……………クレイさん！待って！

すすんでください

何だろう。誰かが私を呼んでいる。けれど私は木箱に辿り着き、役目を放棄しようとしている。神や徘徊者など、人知を越えた輩に立ち向かおうなど愚か者の諸行だ。

すすんでください

ただ、ひたすら聴こえる『すすんでください』を頼りに私は木箱を昇り、縄を首に掛ける。

ここまで行けば後は単純明快。ここから一步前へ踏み出せばいいだけ。

すすんでください

そして私は……………

箱から足を踏み出した。

クレイさん、大丈夫……………!?

ねえ……………起きてよ!

おねえちゃんには助けたい人がいるんじゃないの!?

「ハッ……………!!!?  
!!?!? はあ、はあ……………」

目を開くと心配そうにしていたハルが上から覗き込んでいた。チャコも嬉しそうに近寄ってきて、私の顔を舐め始めた。可愛らしいモフモフとした顔を撫でてやるとチャコはさらに喜んだ。

私は大の字になって倒れていたらしい。けれどどうしたことなのか説明がつかない。

自殺などするつもりは毛頭ないのに何故あのように信じ込んでしまったのだろうか。それにあの私を招いた謎の声は一体……………」

クソツ、どういうことだ。頭が混乱してきた……………」

「びつくりしたよ。クレイさん急にフラフラと歩きだしてどつかにいつちやったから。」

「ここは飛び降りたりとかして死んじゃう人が多いんだって」

「……………」

「私の友達もここでないなくなっちゃったから、クレイさんまで失ったらどうしようかと」

「そうだったのか……………心配させたな。」

「ところで私の最後の記憶では首吊りをしようとした所で止まっているのだが、もしかしてハルが止めてくれたのか？」

「ううん、クレイさんはそこで倒れてたよ」

なるほど、つまりは私は幻か何かを見せられていたということか？

あの時の心情は本心ではなかった。いや、実際に身体を動かしていたのは私自身だが。ややこしいかもしれないが、感覚を伝えるならばまるで映像を見せられているようだった。しかも何度も。何度も。

「クレイさん、どうしたの？」

「ハル、近いぞ」

「え？」

「私の目的地は恐らくここだ。ルキアはここにいる」

「どうして分かるの？」

「どうしてかは分からない。けど感じるのだ。あの子が助けを求めているのを」

私は手を胸に当て、確信のある発言をする。何しろこの山奥に踏み込んでから様子がガラリと一変したのだ。テレビゲームで言うところのラストステージにふさわしい。

手の形をする奇怪な姿の蜘蛛に無数に張り巡らされた血痕の如く真つ赤に染まった糸。どれもねばねばとしていて粘着性のある物質だ。

それに辺りに充満するこの桃色に近い色彩のガス。私達を絶対に入れたくない様子が伺える。

全くとんだ笑い話だ。こんな貧弱な女一人殺せないとは、神とやらも所詮こんなものか。

(面白い。この私を止められるとでも?)

「クレイさん、すごく怖い顔してる……………」

ハルの指摘は私の耳には入ってこず、どんどん奥へと踏み込んでいく。

行く手を阻む蜘蛛どもが押し寄せてくるが、所詮は使い走り。振り切ればすぐに消えてしまう。余裕すら覚えた私に対して

調子に乗るなよ、クソガキども。こんなところまでしつこく追い掛けてきやがって。そのチビツ子にとつて絶望しかないこの場所に何のようだ？

怖ーい山に躊躇なく入ってくるお前たちに私は警告してやっっているのだぞ？  
分かったらとつとと帰れ。私は忙しいんだ。

と脳内に直接語り掛けてきた。しかし私は唾を吐き捨て、貴様こそいい加減にしろ、と脳内で返してやった。

どうやら今のはハルにも聴こえていたようで不安そうな手付きで私のシャツを掴んできた。

「ク、クレイさん。今のが……………？」

「おそらく元凶のおでましであろう。私の目的はヤツを何とかして従妹を救うことだ」

「うん」

「……………なあ、ハル。一つ、友であるお前に聞きたい」

「？」

少しだけ間が空いた時に私は口を開き、こう聞いた。

「私はお前にとって『ユイ』という存在に成り変わったのだろうか」

「……………なんでそんなこと聞くの」

「大事だと思っていた人にそれをしてやれなくて後悔しているのだ、私は。

……………なんだろうな、巧く言えないが私は親しい存在を欲していただけなのかもしれ

ん。それだけだ」

それから二人は一言も会話をせず、山奥へと突き進んでいった。

蜘蛛どももそうだったが、今度はアメンボの姿をした怪異までもがこちらに目を向けている。けれど、襲ってくる様子などもなくじつと此方を伺い、木の枝にぶら下がり続けている。

不気味だが、氣をとられている余裕もない。その怪異を後にし、私は足を進める。

しかしそう甘くいく話もなく、私は何かに足を取られその場に勢い良く倒れこんでしまった。

振り返るとあのアメンボや蜘蛛が無数の糸を絡み付けてきていた。

(クソツ、足が!?)

過去に対する因果を表すのか。それとも単純な私への恨みか。

少なくともこのまま掴まったままでは、確実に二人とも殺されてしまう——そうとなればとるべき行動は一つだ。

——ハルをこの場から逃がす。それしかあるまい。無駄死にはさせないし、したくない。

私は力を込めてハルの背を押した。想定していなかった彼女は押されると同時にふらつき、よろめいて転びそうになったが無事、奴等の射程外から脱することができた。

ハルが此方に心配そうな顔を向けている。チャコも同様だった。しかし彼女を救うのは私ではない。

純粋で勇敢な心を持った『主人公』でなければダメなのだ。

私は幾度と見てきた。彼女<sup>ハル</sup>の行動を。

決して立派と言えるべきことはやっていないのだろう。実際、私のほうが救った回数が多い。さまざまな怪異や徘徊者から逃がし続けた。

だがそんなことをしなくても彼女は大丈夫だった。

余計な世話をしていたのは私だった。

自分を正当化しようと、一方的に思い込んで、決めつけて——身勝手だった。また悪い癖が出てしまった。ハルの意思を聞こうともしなかった。言い聞かせてしまった。純粹な心に甘えていたのだ。

だから今回はハルに決めさせたい。

本当に私たちを思ってくれているのか。

自身の意思ならば、きつとやってくれるはずだ。やらなくても私は責めやしない。私のせいだ、何もかも。この因果を生んだのも全て。逃げてくれても構わない——  
けれどあわよくばいい。私達の尻拭いをしてくれないだろうか。

この物語の『主人公』は君だ。私じゃない。私は勝手に因果に巻き込んだだけの、ただの一般人だ。全てが『君たち』の選択で決まる。

「ハル！」

「クレイさん!?何してるの!?逃げないよ!」

「『ルキア』<sup>家族</sup>をどうか頼む!!」

「!?……………」

ハルは考え込んだ。幼い頭で一生懸命考えた。託された事実を受け入れがたかった。なんで自分なんかそんな期待するのか。自身が無かった。友<sup>ユイ</sup>を助けてあげられな

かった私に何を期待するのか。

けどハルは放っておけなかったのだろう。目の前の事実**に必死な彼女を**。二人は似ていたのだ。

性格は全くと言っていいほど異なっているし、人間関係の形式もまるつきり逆。

しかし本質は一緒なのだ。どちらも優しい心を持っていた。どちらも親しい人をどうしても見捨てられない、しつこい性格の持ち主だった。

過去の因果なども気にせず、進んでいく。怖くてたまらないこともある。それも同じ。

彼女を見てきた君なら思うだろう。この女性ならば、何にも臆することはない。困難にも構わず突き進んでいく、と。

実際は違う。彼女はとても怖がりだった。挑戦するのが不得意だった。

内緒だが、クレイが一番苦手なものは実はお化けだ。

大嫌いだった。暗闇も異形も——途中<sup>トウチュウ</sup>までは。彼女を変えたのは、周りの環境や努力もある。けれど影響を大きく与えたのら家族<sup>ルキヤ</sup>の存在だった。

自分のことなどでよくよしている場合などではない、と彼女は悟った。家族が苦しんでいるのを放つてはいけない。何故ならば放つて置けば死んでしまうから。

動かなければ。大事な人やものが次々に手元から零れ落ちていく。闇夜に消えてしまう。

ここまで大層なことを述べたが、簡単に言えば、彼女は怖がる対象を変えただけである。

そう、彼女<sup>カレイ</sup>は失うことを怖がったのだ。

それが強い決意を生んだ。あの強気な性格や体格も全てそれが始まり。クレイは気づいた。私達は同じだが、それぞれ役割がある、と。その想いに答えたい。ハルも彼女と同じ思いを抱きつつあった。

ハルは一瞬、不安そうな挙動をとったが、我に返ったように首を振った後、自信に満ちた顔でクレイに呼び掛けた。

「こっちは大丈夫！クレイも気をつけて！」

それを聞いて安心したぞ。任せていいな？ハル<sup>友</sup>よ。

私はニヤリと笑い、山奥へと続くハルを見送った。さて、ここからが本番だ。この状況をどうやって切り抜けるか……………

すると、残光がアメンボの胴体を掠め、その瞬間に怪異は真つ二つに両断された。

そして私の前に人影が立ち塞がった。

「お、お前は………!?」

## 第十三章 虚空

暗い、暗い山道。どこまでも続く闇の回廊。血を帯びた糸に、おぞましい形状をした蜘蛛のお化け。ハルは一度この場所へと訪れたことがあった。

そう、それはかつて友達と呼んだ大事な人を探しに夜の町へと飛び出したあの時のことだった。

思えば、ユイのことを助けてあげられなくて謝っていた。気づいてあげられなかった。ハルはそんな後ろめたい思いでいっぱいだった。

それにそんな怖い思いを沢山抱き、また恐怖を蘇らせるような阿保のする所業を繰り返そうとしているのだ。

正気では誰もかたが友人程度の頼みで訪れたりはしない。

だがハルは今、勇敢な気持ちで心を満たしていた。はつきりとした理由は本人にも分からない。もしかしたら救わなければ自分の良心が痛むだからとか、彼女を憐れむ気持ちから呼び起こされたものなのかもしれない。

けれど 彼女のおかげという点は間違っていない。

彼女はかつての自分と同じ事をしようと試みている。

大事な人が遠くにいつてしまわないように、もう何処へも行かせないために。そんな自分勝手な願望にしがみつこうとしている。そんな気持ちがハルは感じていた。

あの時の自分も似たようなことをしていたから

暗闇を突き進んでいくうちに、見覚えのある場所へとついた。ユイとの糸を裁ち切ったあの場所へと。

ハルは躊躇することなく足を踏み出した。友達に頼まれた願いを聞き入れてあげるために。

「気持ち悪いよお……………」

そんな自分の気持ちとは裏腹に弱音が口から漏れる。分かつてはいる。私はユイみたいに勇気があるわけじゃないし、クレイさんみたいに肝が座っていて強い心を持った

人じゃない。

自分を受け入れなきや、とハルは自分に言い聞かせた。今まで自分は何をやってきたのだ、と。

怖くて辛くて悲しかったあの体験を友達にあわせてたくない。そう念じ続けることによつて、なんとか恐怖を押し殺し、深淵へと一步、また一步と足を伸ばす。

洞窟は以前よりさらに不気味になっていた。蜘蛛の糸は減っていて、気味の悪さは無くなっていたが、何も無い真つ暗闇に沈んでいる。不自然なほどに何も無い。

進んでいくうちにその助けたいお姉さんルキアさんの気持ちに段々と踏み入れている気がした。どう思っているんだろう。お姉さんルキアさんは私とクレイさんが助けに来たことを知っているのだろうか。

視界が霞み、洞窟からどんどん何処かの家の景色に変わっていった。真つ暗で電気も何もついていない。狭い一軒家のなか。あるのは無数の血痕と立ち込める腐敗臭のみ。

あまりの悪臭に吐き気を催し、立ち止まりそうになったが、ハルはハツと我に返った

かのように俯いた頭を再び前方へと向けた。

人影が見えた。震えている。長く灰褐色の髪が鈍く光っているのが見えた。背を向けている。此方を振り向く様子はない。

お姉さんルキアさんだ。やっと会えた。けどなんて声を掛ければいいんだろう。戸惑ったけど一言だけ、帰ろう、と説得してみようと近づいてみた。

けれど、お姉さんはブルブルと体を震わしていて一向にこちらを見ようとすらしない。寒いのだろうか。それともこの場所が怖いのか。

次第に体の動きもまるで糸人形みたいにぎこちなくなつて、おかしくなつていった。あの時のユイみたいだ。死んでしまったことで生まれた執念と悲哀。お姉さんルキアさんからも同じ雰囲気を感じ取った。

そして、此方を振り向いた。しかし

「ひっ……………」

振り向き、自分の顔を見詰める虚空の瞳に私は驚いてしまった。瞳には何も映っていない。お化けみたいな目をしていた。何もかもが信じられなくなった瞳。それがどうしようもなく、怖くて仕方なかった。

だけどそれが不味かった。お姉さんのその瞳から真つ黒な涙が頬を伝った。それに連れて、残っていた眼の白いところまで完全に虚空に染まってしまった。

カタカタと奇妙な音を刻むお姉さんは、私の肩を掴みかかった。抵抗しても離そうとはしなかった。

「は、離して……………！」

「あ、貴方も……………」

「え、」

そんなに怖いですか？……………私が

生が込もっていない声で目の前のお姉<sup>怪</sup>さん<sup>物</sup>はゆっくりと言った。ここまで変化してしまっていると、ハルは逃げずにはいられなくなった。

何故なら純粋に人の闇を覗き見てしまったから。ユイと同じように様々な念が混同し、おぞましいものへと変わってしまった。それがどうしようもなく怖かった。

何も映し出すことのないその顔でぱっくりと裂けた笑みを浮かべ、彼女は消え失せた。

ハルは、これ以上ここに長居すればこの身が危険に晒されることを悟った。足を一歩、また一歩と踏み出す度に世界が歪み、血生臭い悪臭もひどくなる。さらには、壁や床までもが腐敗した血に侵食されていく。

世界が揺らぐようだ。ハルは駆け出した。なんだかここにいるだけで自分も侵食さ

れてしまうのではと感じたからだ。

玄関を飛びだし、外へと出ると、雨が降っていた。雷がゴロゴロとなっている。嵐みたいな雨がザアザアと降り続けている。傘なんて都合の良いものは当然、持ってきていないし、雨宿りなんてとてもじゃないが出来そうにない。

雷が時々脅かすので、ポシエットを気にしつつも、ハルは雨のなかを進んでいった。服もグシヨグシヨになっっちゃって、気持ち悪いと思いつつも一歩ずつ前へと進むしかなかったのだ。

かつて出会ったあの女の人のお化けを思い出した。彼女はサムイ、サムイと苦しがつていた。

死を目の当たりにしてとても寒い思いをして、死んでしまったのだろうか。そんなことを思いながら、ハルは急ぎ足で雷雨のなかを進む、どんどん進む。

雨風のなかから、車が走り去っていった。停まってくれなかったことに疑問を抱いたけど、一安心と胸を撫で下ろしたかった。が、その車は首が失くなった女の人が運転し

ていた。

ほらほら、進め進め。おっと、そこ気をつけないとお車に引かれちゃうぞ。

車が去ったと同時に頭のなかでうつすらと声が聞こえた気がする。でも雨の音による空耳かもしれない。けど私に囁き掛ける声はあのお姉さんのものではない。もっと別のナニカだ。凄く悪いヤツ。それがお姉さんを苦しめているんだ。

しかし足を滑らし、谷底に落ちてしまった。あつという間だった。今まで散々、死ぬ思いをしてきた。それなのに、何故かこのときだけ。

本当に死ぬ予感がしてしまった。一瞬、笑った顔をしたユイが見えた気がした。

「あつ」

最後に発したのはたった二文字だった。人は死の縁に立たされると何もいうことはできない。

物語のような大層な台詞を残すことすら許されない。けど、まだ。まだ私は……………

クレイさんとの約束を果たせていないのに

そんなときだった。

「ハル!!」

「!？」

「動くなよ!?!そのまま引つ張りあげる!」

誰かが私の名を呼び、落ちていく体を掴んでくれた。私は言われたとおりにじつとし

ていた。そして、そのまま引き上げてくれて、崖下に落ちることを免れた。

誰かと思い、頭を上げるとそこには見覚えのある顔が伺えた。嬉しくて思わず名前を叫び、飛び付いた。

「クレイさん！」

「危なかった……もう少し遅れていたらどうなっていたかとヒヤヒヤしたぞ」

「ごめんね………私」

「いや、謝ることはない。………無事で良かった」

ハルの肩を両手で押さえ、クレイは彼女の身柄が無事なことをもう一度確認し、胸を撫で下ろした。チャコもついてきていた。かわいらしい態度を表し、安心する気持ちを高めてくれている。

クレイさんもここまで連れてくることを許してくれたらしい。

「ところでクレイさん」

「ん？なんだハル」

「その……どうやってここまで？あの状況からどうやって……」

「……………あ、ああ！そ、そんなことか！お前も見てきただろう、私のしぶとさを。何、心配に及ばん。フハハハ！」

気のせいかな、心なしかクレイの表情に焦りが見えた気がしたハル。しかし、今まで嘘をついたことがない彼女に限って今更隠し事などない。そう思うことにして、ハルはこれ以上追求しなかった。

「そ、そう？……………ならいいんだけど」

「そ、それよりも！ここは何なのだ？私達は確かに洞窟に入ってきたつもりだったのだ

が……いきなり町に出るとは思わなかったぞ。しかも、こんなどしや降りの豪雨の中に」

「ここは……多分、お姉<sup>ル</sup>さん<sup>キ</sup>の心のなかだと思う……」

「心の中? どういうことだ? ハル、そんなことが有り得るのか? ……いや、そんなことは今更か。この夜では常識など通用しない」

「うん、そしてここが本当にお姉<sup>ル</sup>さん<sup>キ</sup>の心の中だしたら……」

「相当、蝕まれているな……。これは予想以上に一刻を争う事態になっているのかもしれない」

「急ごう、クレイさん」

夜は段々と濃く、深くなっていく。闇は救うべき対象を蝕み続けている。ここから救うべきなのか、彼女が望んでいるかなどは関係ない。きつとルキアは私が助けに来ても

差し伸べても手をとってくれないかもしれない。

でももういやだ。家族を失うのは、許して貰えなくても私は貴方を助けたい。たとえば腕や足がもがれようと。

必ず、必ず助ける、そう心に誓った。

歩み始めた彼女達を高所から睨みつける影があった。赤い眼光に静かな怒りを滾らせながら、ヤツは不気味に笑っていた。

「決着をつけようか………巫女さん♪」

## 第十四章 断ち切り

ここは……………何処だ……………？

ウグツ……………足が……………酷く痛む……………！

そうか……………ここが……………属に言う『あの世』というヤツか……………

視界もボヤけてよく見えん……………なんだ、呼吸がままならない……………

い…息が、苦しい。私は……………私は果たすことが……………出来たのだろうか……………

ハル。ルキア。君らが無事であることを心から願う。それだけが、何よりの願いだ

……………。

そうして彼女は氣を失った。暗闇の中で何も無い虚無の空間。辺り一面が血塗れになったその闇の中で左足を失ったクレイは力尽きた。

　　時は数十分前ほど遡る

　　一匹の鯨は思考を続けていた。今、私の女達の幻想案に侵入者が迷い込んでいる。それの撃退法を模索しているのだ。

　　あの時、私は全身を焼き尽くされ、巫女を死ぬ程恨んだ。私達が何をしたというのだ。人間であるお前達は少々勝手が過ぎる。

　　あの場にいた何千という同胞が一瞬にして、消された。たった一つの間人間達が落とされた流星によって。

そんな中、あの女どもは「森は恵みを与えてくれる楽園です。森は何がなんでも死守しなければならぬ聖域なのです」などと大層なことをほざいていた癖に、これっぽっちも守れてないじゃないか。

何が巫女。結局は奉られ、意気揚々と調子に乗った木偶の棒どもだ。

末裔もこの通り、私の手中に収めた。今や、あの女どもは私の意のままに動く操り人形。

初代に封じられたのは癩だったが、復活したその後の世代は難なく成功した。この器の男とあのタラバガニみたいな異教この島の神。あれらには感謝せねばな。解き放つてくれてありがとさん。

それに比べ、巫女の末裔どもはすっかり恋愛漫画に出演できそうなくらい腑抜けになつちまいやがって。とことん幻滅させられたものだ。まあ、昔からガキみたいな夢を見る大馬鹿だったがな。

一番、マシだったのは最後に収めたルキアとかいうヤツ。アイツは個人的にお気に入りだ。どことなく、ヤツは私に似ている。

憎しみを抱き、見出だせる目標といえ、復讐くらい。私に刃向かうほど生意気な小娘だが、そこが素晴らしく、美しい。実に自然だ。

奴らをいたぶり、利用し、私はこの世を治める神になるのだ。神社やちっぽけな大地を治めるなど人間より下劣な行為。

フフフ

これからだ、始まるのは。今まで、あの肉の塊よまわりさんや蜘蛛山の神に幾度となく邪魔されたが、私が支配者になる日はすぐそこまで近づいている………！！

裁きを下す準備が整った。後は人間どもに尻尾を振る狛犬どもを消して終わりだ。私が直々に叩き潰してやる。

大丈夫、すぐにすむ。歯医者に行くようなものだ。いや、電子レンジを待つのと対して変わらないか？

邪悪な笑みを浮かべ、彼は全身に炎を滾らせた。今度こそ、かつて受けた長年の屈辱を果たすために。

そういや、あの車とかいう乗り物は本当に乗り心地が良いのだろうか？人間の感覚の理解にはとことん悩まされる。

一方、クレイたち二人と一匹はこの世界からどう脱するか、難儀していた。

といつても確実性のある解決法などは当然、思い付くはずもない。何せこの世界は人の心。他人である我々にはどうすることもできない個人の世界。

今まで幾度の怪異を退けてきたというこの勇敢なチャコにも駄目元で頼んでみた。

が、相変わらず可愛らしい鳴き声と容姿で、こちらを見詰めてくるのみだった。

（流石に駄目か……分かつてはいたが）

だが呼び掛けるという行為をしてみても、一つの案が頭に過った。ここは先程も言ったとおりにあの子ルキアの中ならば、呼び掛けて説得を試みれば脱出できるのでは？

幾ら私が嫌われているとはいえ、元々お前は、優しい性格の子だ。私は駄目でも、ハルだけなら逃がしてはくれないだろうか。

しかし無我夢中で怒鳴り散らしても、あの子はますます心を閉じてしまうかもしれない。ならば、気付かれないように心中で祈るしかあるまい。

今まで自分は祈りなど捧げてきたことはなかった。けれど今回ばかりはお前に祈る。神にではない。お前、私が愛す『ルキア』に送る。

（頼む、ルキア………耳を傾けてくれ………！）

「……………！クレイさん、雨が……！」

すると祈りが通じたのかは分からないが、あれだけ涙のように降り続いていた豪雨が微かに降る霧雨へと変わった。槍のような尖った水滴で遮られていた道も目視できるようになった。

これで、当てずっぽうで進むこともなくなる。チャンスは今しかない。

「行けるか？ハル」

「う、うん！お姉ちゃんを助けよう！」

「よし、その意気だ！」

「アン！」

私はその場から駆け出し、真っ直ぐ彼女の元を目指した。助走をつけ、勢いを増していく。だが今回は、ハルとチャコは置いていかない。

一緒に救ってくれると約束してくれた。必ずともに果たそう。

しかし向こうも簡単には行かせてくれない。歪んだ空間の歪みから、町中の怪異が押し寄せてくるのが見えてしまった。

膨大な数だ。追い付かれでもすれば、彼らのデイナーになるだけでは済まないだろう。

だがやることは変わらない。ここからはいつもと同じく、鬼ごっこの開始だ。

とは言ったものの、さて、どうするか。今回は敵の縄張りの中。身を隠したところですぐに見つかってしまうのは目に見えている。

ならばどうすべきか……。迷っている時間はない。ハルにはまた迷惑をかけてしまうが、出たとこ勝負となりそうだ。

足下も視野できないほど、辺りは暗闇に満ちている。けれどよく見れば、この場所にも見覚えがあつた。

そうだ。前に私達が住んでいたときによく遊んでいた彼処じゃないか。ならば、状況

はこちらが有利になる。

「ハル、今からチャコと一緒にお前を担ぐ。ハルには後方のお化けたちを見張っててくれないか」

「……………うん、でもどうするの?」

「……………さあ……………正直賭けだが、この場所は見覚えがある場所とそっくりなんだ。もしかしたら安全なところが一つ心当たりがある。そこに逃げ込もうと思う」

「……………わ、分かった」

すまない、ハル。また私の身勝手なわがままに付き合っただけで貰うことになりそうだな。だがこれももう最後になるかもしれないんだ。

救った翌日には、お前の家に遊びに行こう。こんな夜更けじゃなく、ちゃんとした昼間にな。で、いつかルキアも連れてきて……………引越しを手伝ってやりたい。それ

で、盛大に見送ってやろう。

大人になる、というのはそれだけ負荷や責任も大きくなるのしかかってくる。……………ルキアやハルは大人に成長する度、苦勞することになる。心に傷をおった者はもう二度と元に戻ることはない、と父から教わった。

ならば私にできるのは、その心を修復することか。否、それは違うな。なるべくその傷付いた彼女達の側にいてやることこそが最善策。きっとあの子も心の何処かでそう願っていると思おう。

などと考えていると、いつの間にか目的の場所へと着いていた。後ろを振り返ってみたが、先程まで押し寄せてきた靈魂達が嘘のように静かに

「ねえ、……………本当にここなの？ルキアさんがいるところ」

「悪趣味な雰囲気以外は何も変わってないな……………間違いない。ここだ」

着いた場所は、少し古ぼけた小さな小屋。彼女は辛い思いをしたとき、いつもこの場所です。一人で寂しく引き込まれて泣いていた。何かあれば、ここにいるのが定番だった。慰めによく訪れていたのを思い出す。

彼女はきつとここにいるだろう。いつものように冷静に扉を開け、中に入った………と言いたところだが、今回ばかりは違った。

戸をグツと引つ張ろうとしても開くことはなかった。手元を見ると、予想以上に震えていて、ドアノブの鈍い音がガタガタと鳴り止まなかった。

(クソツ、どうしたというのだ。まさか怖じけたとでもいうのか……!?)

そんな時、ハルが何も言わずに震える私の手の甲を、そつと優しく合わせてくれた。何故か、胸が温かくなり、私は冷静さを取り戻した。

「ああ、ハル。大丈夫だ。もう心配いらぬよ。そうだハル、一つ約束してくれないか？」

「?何、クレイさん」

「これが終わったなら引つ越すまで、沢山遊ぼうな! ユイに負けないように、立派な友達になってみせるぞ!」

私は全力の笑顔をハルに見せつけ、約束をさせた。嫌だと言われようが、関係ない。私がそうしたいのだ。多少なら許される。

「……………うん、約束だよ」

そうして私たちは二人で同時に、扉を押し開いた。ギシギシと軋む音がし、闇へと続く入り口が開かれた。中は何も見えない。だが、ハルの懐中電灯があれば辛うじて足元なら見える。

玄関の後は、確か廊下だったはずだ。その後、少し進むとリビングに出る。その後は上へと続く階段を登る。黒く濁った不快な空間はどんどん重圧を増していき、今にも息が詰まりそうだ。

そして、ここだ。二階の古びた客室。ここをルキアはよく隠れ家にしていた。古びた故か、錆び付いたドアが1部屋だけ閉まっていた。

ドアノブを取り、戸を引く。その先には、予想通り。こちらに背を向け、体育座りをして、隅に踞っているあの<sup>ルキア</sup>子がいた。

「ルキア！良かった、心配したぞ！」

「……………姉さん……………？姉さん！」

すると、彼女はまるで赤子かのように、私に寄りすがつてきた。よろよろとして体調も優れないようだ。それに普段ならば、こういう甘えた行動は彼女はしない。常に心を閉ざしていた。この私にさえ、も。

けれど彼女が弱気になっている。それは即ち、気持ちをさらけ出すほど、辛い思いをしてしまった、ということだろう。

私はホツとして胸を撫で下ろした。てつきり奥地にて、元凶である鯢あひが待ち構えているとばかり思っていた。

もしかしたら、この場所はヤツにも唯一気付かれない安全地帯だったのかもしれない。

何にせよ、もうこんな傷を抉ひるようなところに用はない。私は従妹であるルキアの手をとって、この場を後にしようとした。

………が、後ろを振り返るとある人物がいなくなっていることに気がついた。

「ハル?」

ハルがいない。チャコも。何が起こった……?先程まで、彼女達はすぐ側にいたのに。急に姿を消すなんてことが有り得るのか。

不穏な空気が辺りに充満する。嫌な予感がした。私は手を繋ぐ家族に警告しようとした。だが、奇しくもそれが叶うことはなかった。いや、遅かった、という方が正しい

だろうか。

振り向いた時、私の頬に激痛が走った。そして、私は床にへたり込んでしまった。

「グッ!?……………あつ……………」

何がなんだか分からなかった。理解に苦しんだ。

どうして……………どうしてルキアが私のことを

殴ったなんて。

「ふう、スッキリしました。あまりの阿保さに反吐が出るかと思いましたよ」

私は赤くなった頬を押さえながら、済ました顔を見せる彼女に尋ねた。

「何故だ、ルキア!?私のことをそんなに嫌っていたとでも言うのか……………!?」

……いや、それは仕方がない。私はそれだけの罪を犯した。嫌われて当然だ。だが、お前はこの空間を好いてはいないはずだろう!?私を殴ってもお前にとって、メリツトはないはずだ!」

「ええ、まあ確かに、それもありますけどね……。けど、別に私はそれだけの理由で、貴様を殴った訳ではないんだよ」

口調と声の質に違和感を覚えたとき、ルキアの瞳が血を模したように真っ赤に光った。その時、確信した。確かに容姿はルキアだが、中にいるのは、全くの別のナニカである。

「!、お前は……。!?あの時、神社であつた……。?」

「あーあ、折角忠告してやったのに、こんなところまで来ちまいやがつて。とんだシスコン尼だな。」

だが、丁度良い。貴様の一族にはうんざりしてたとこでな。溜まった鬱憤を晴らしたいと思つていたところ、だツ!!」

「グフツ!？」

今度は振りかぶった拳を突きつけられ、再び頬を殴られた。よろよろと立ち上がるが、立ち上がる度に、一発、もう一発と拳が私を痛め付ける。

ついに立ち上がることにすら、ままならないほど青あざが顔中に浮かんでいた。歯も何本か折れただろうか。

そして、胸ぐらを掴まれ、さらに猛攻が続く。一つ一つの拳に憎悪が詰まっているみたいだ。そして、乱雑に投げ捨てられ、おまけに足による腹蹴りを何度も叩き込まれる。

「可愛いルキアには二度と会えない。そう、二度と、なっ！」

「グハツ……………あ、クツ……………カハツ……………！」

「そうだ、最初からお前が目的だった。腑抜けた巫女の一族なんて、どうでも良かったんだ。目障りなのは、お前だ。」

この女も心の底でお前を恨んでいるぞ。なあに、嘘じゃない。私はルキアの中にいるんだ。気持ちには充分に見透せる」

憎たらしくソイツは、ルキアの体を使って私を痛め付けている。それがどんなに苦しいか。心の何処かで、この光景を眺めているとしたら。

私が………力尽きて、死んでしまったとしたら。それは永遠に消えることのない深く暗い傷になって、彼女を蝕むことになるだろう。私にとっては、それが一番辛い。

何としてでもそれだけは見せたくない。今まで、強がついていた家族が無惨にも殺されるような光景を目の当たりにすれば、幾ら病んでいる彼女でも、無事では済まない。

耐えて………届けなければ。私に燻る、この愛を。理解などしなくても構わない。しかし、伝えなくして死すのは、私のプライドが許さない………!

「ルキア、聞こえているのだろうか？頼む、少しでいい。私の言葉に耳を傾けてくれ………!」

「何度言わせれば分かるのです……………?! ルキアと貴様は二度と会うことはない。いい加減、そのふざけた妄想は止めにして、さっさと死ぬのですよ……………!」

時々、ルキアの口調である敬語を混ぜて罵る行為が、凄まじく憎たらしい。ヤツは脚蹴りを続けた後に、再び胸ぐらを掴み、顔の目の前に持つてきた。

血のように真っ赤に染め上がっているその瞳の奥。そこには何処か悲しみも含まれていた。

「折れねえな……………。相も変わらず、私を舐め腐った眼で睨みやがって……………!!」

人間は昔から私を下等生物と侮っていた……………!! どれだけの同胞が死んでいったと思うんだ? ああ!?

人間だけがこの世界にのさばっていると思ったか!! 何処まで夢見てやがる!!」

さつきまで、余裕綽々としていた怪物は頭に血が登り、より感情的になつていて。かつて何かあつて、こんな強い憎悪の塊になつているか、知るよしもない。が、今はそんな感情的になつているならば、私の言葉が彼女に届くかもしれない。

力を振り絞り、再び立ち上がる。そして、呼び掛ける。大事な家族に。友との約束を果たすために。そうだ、彼女を救うことはハルとの約束とも繋がるのだ。助けるんだ、彼女を……………！

「ルキア、聞いてくれ。私は……………」

「誰に物を聞いている。ルキアはもう出てこないといったばかりですよ」

「黙れ!! 私は貴様と話しているんじゃない!! ルキアと話しているんだ! 引っ込んでいろ!」

「何だと? 誰に口を聞いていると思っっているん、だっ!!」

「グハツ!!?……………ハア……………ハア……………ハア……………なあ? ルキア、迎えに行くのが遅くなってしまったな。悪かった。助けに行けなかったことは後悔してる。でもな……………うう」

傷と痣だらけになった顔をいつの間にか、大粒の涙で顔を濡らしていた。いつもは涙など簡単に流してはいかん、と父に言われているが、どうしようもない。何故なら、自然に溢れ出てしまうからだ。

そして、勢いに身を任せ、彼女を抱きしめた。確かに操られて、自我を失っているためか、彼女の身体は一見すると死人のように思えた。けれど、それとは裏腹に、冷たい肌の奥に小さく揺らめく、ぬくもりが眠っていた。命の鼓動が微かに聞こえた。それを知ると、涙が止まらなくなった。

まだ、まだ生きているんだ。私はあるのままの言葉をルキアに伝えた。

「……………もう、大丈夫だ……………。助けにきた……………お前をもう一人にしないっ。ずっと

と一緒にいるぞ……。ずっと、ずっとだ……。私のは好いていないだろう？ 私との関係を断ち切ってくれても構わない……。くっ……。でも……。でもっ

もう一度、お前と家族の糸を結び直すことはできないかなあ……。？ 帰って来、てくれ、頼む……。！ 私に償いのチャンスをくれっ……。！」

「……………ううっ……………」

なあ、ルキア。お前には、友がもう一人出来たんだろう？

私にも出来たんだ。ハルっていう可愛らしい片腕の少女。昔から堅物で、頑固だった我々には、無縁のことだと思っていたのに。

生きてみるというのも、案外悪くないものだぞ？ それに、私はお前とまだまだ遊び足りない。もっと冒険がしたい。一緒に悩みたい。笑いたい。時には泣いたっていい。

「うう………姉さん………」

彼女の中に宿っていた、憎悪の塊が消えたような気がする。すると、背中から冷たい液体が滴る感触が伝わった。

泣いているのだ。ルキアも。

「………っだ、駄目………！押さえられ………ない」

しかし、自我を取り戻したのは一瞬の出来事であった。再び絶望を臭わせるオーラが彼女を包み込んだ。

ヤツだ。ヤツが再び、彼女の心身を乗っ取ろうとしているのだ。

「………ったく。まだ自我を残していたか。もう、この身体は私のものだ。大人しく、テレビでも見てるんだな」

「も………もう………」

「ん？どうした、金髪ちゃん。腹でも痛いのか？」

「もう、止めろ！何故、貴様はこんな非道なことを続ける!?  
私、私は……………彼女を傷つけるのは

もういやだ

チャキン

「何ッ?!?!? 何故、貴様が?!?!?」

私が最後に見たのは、巨大なハサミだった。そして、私はとても大切なナニカを激痛と共に失ったのだった。